

凡例
 井 于潮水面岩
 十 干潮ノ水巨穴吹ヨ
 リ深カラザル岩石

145°

160°

緒言

願回すれバ昨癸巳の歳三月豫備海軍大尉郡司誠忠氏が數十の壯丁を率ゐて千島拓殖の行途に上るや、實に路を我國東海岸にとりて洋海漫々の中に五隻の艇舸を操漕したり、人以て近代の奇事と爲し世譽て毀譽交至る、莫遮墨堤河畔に纜を解てより東京灣を横截し外房州より九十九里、鹿島の灘を通過ぎ、磐城沖より金華山、南部八戸に至りて海若の爲に窘められ、一小頓挫を招きたりと云々、其間怒濤を破り激浪を厲りし事行程數百哩、仔細に之を觀察すれば誰れか我國艦海上の新生物ならずと云はんや、横濱函館若くは萩の濱、巨帆鯨艦の往來固より多とするに足らずと雖も、新島津々浦々、一小灣一岬角と雖も、之に觸れ之を縫ふて駛りしもの、良し漁民が能く巖岸暗礁細小灣も之を審にする自然の慣性ありと云へ、奈沿岸附近の地に過ぎず、此長行程の間之を能くしたるもの、近世報效義會の端艇航を除て世間能く何物かある、一半は暗に國人の海軍志士を稱し、一半は大尉郡司氏を始め國防上冥々の中海軍の知見を高めたるに云ふまでの事なし、假令一小頓挫あるも其功績の實に千歳不磨のものある也、此端艇紀行會て連載して我紙上に在り、今此篇と共に綴らんと欲したれども徒らに浩漭に失し且つ往々緊切を缺くの嫌ありたれば之を省く、故に單に大尉の功績千歳滅せざる所以を一言して長く紀念に止めんと欲す、千島紀行も併て我朝日紙上に連載したるもの、今一篇に綴るに當り聊か世人に一言せざるべから

ざるものあり、大凡何れの地何れの海を問はず、舟楫稀に通じ人跡容易に到らざるの處、大に其地の險を探り奇を尋ね、真相を世間に明にせんとするもの、苟も其一斑を以て全豹を臆断し、寸毫を以て尋尺を推測せば蓋し群盲巨象を評するの嘆なきもの稀なり、況んや千島の如き六百有餘の海哩間、三十餘の群島、其地勢の異なる處地質の反する處、況んや複雑極りな海陸無数の所産、其性を極め其類を明にする到底一朝一夕の事に非ず、故に余の千島に遊び千島の實況を報ずる唯單に目に之を見、耳に之を觸れたる者を列叙したるに過ぎず、故に直に之を以て千島の海に如此、山に如此と逐断したるは少しく早計に失するを免かれざるべきか、特に世間探検記と稱する者の如き、探検者其人の感情に依て大に異なる所あるべし、或る者矮木雜草を見ては直ちに刃寒不毛の地と斷するもあるべく、或者水禽巨鱗の翔泳を見ては直に寶藏無盡の處なりと稱へるもあらん、他日苟も千島の遺産を興し遺利を拾はんとするもの、人各其業に自ら難易輕重の差あり、互寒不毛決して刃寒不毛の地に非ず、寶藏無盡強ち寶藏無盡の處にも非ざるべし、余の此紀行單に自ら目撃聞知せし一小局部の事を記するに過ぎざれども由りて以て千島の我極北の版圖にして關論の忽にすべからざるを知り念頭千島を忘れざる人の爲に參考の萬一を補ふ事を得ば望外の幸ならんのみ

横川 勇次 識

千島紀行

横川 勇次 著

第一 泰陽丸

明治廿六年七月廿日午後一時大阪商人阿部市の所有帆船泰陽丸(積量百卅噸餘)探提島紗那へ入港し來り、元來泰陽丸馬場頑四郎となん云へる人の之を借切り千島群島中「シヤスコタン」へ碇し、探提島の爲に向ふものなりき、此時報效義會の一行郡司大尉を始め皆探提島に在りて前途の計營に骨を折らし身を碎きつ、常に極北の空を望んで目的の地占守島に到るに船舶なきを痛嘆し焦慮苦心の際なりし故泰陽丸の入港に實に得難き好機會にてありし、馬場氏一行の上陸を待ち大尉面接して諸般の契約を取結び報效義會の一行便乗し得たりしなり、即ち七月廿一日泰陽丸出帆して同州一由「シヤスコタン」に着し八月廿六日まで同島に滞留し歸航の途次遇然にも「シヤスコタン」沖にて軍艦磐城の占守近海に測量の爲め派遣せらるゝに遭ひ之に乗換へ八月卅一日占守島片岡灣に上陸し九月廿三日幌筵島柏原灣を解纜して歸航に就き同廿七日根室に着したるまでの紀行なりとす

七月廿一日午後三時泰陽丸の前橋後橋帆を充分に張上げ錨を抜きたり紗那の探提にては都なれ元一小漁村に過ぎざる地、特に會員の滯島以來日猶淺き事なれば親しき身寄朋友のあるにも非ず見

送人とても大尉の嚴父成延翁を始め残る會同妻子等のみなれば誠に淋しき首途なれども何んとな
く氣の勇る、心地して皆元氣良げに、見えしかど會員中幼き兒のあるもの、其妻より強て兒を抱
かせられ鬼を欺く許りの男が兒を揺ぶり、本船まで伴ひ行きしもありて憐れにも亦可笑しかり
し愈々出帆に臨んで「左様なら」の聲、唯しく別を告ぐれば、來年首尾能く再の逢瀬を待つ許り留る
もの行く者齊しく是旅の空、哀別離苦の情一しはに深かり、人知れず涙を袖に包みしも多かりし
ならん

船ハ針路を北西にとりて走りたり、夜に入れば黒白も分かぬ暗夜にて四方唯渺茫時に狂瀾の舫を
叩くの音あるのみ此日寒暖計ハ正午七十九度午後四時七十八度を示し内地の彌生中旬の氣候にて
寒からず暑からず實に心地良き事なりし食事ハ馬場氏の入夫と共同になし甲板の上に大なる籠をし
つらへ銘々に椀と箸を持って手盛を爲す坐る所もなければ立ながら喰ふ、船、動揺する時ハ足定まら
ず兩手に椀と箸を以て甲板の上を間違つき歩く食事申思はず噴飯する事も多かりし

航海中

明て廿二日朝發に促がされて船内をもぐり出で海水にて顔を洗ひ例の如く椀と箸を手に持ちたり
食事終れば用事なき身の徒然なれば又も臥床にもぐり込むより外なし、船倉出入口近くの外の
船内暗くして書見も儘ならね、唯高聲詩を吟するか、さてハ都々一、義太夫と各秘藝を盡し時な

らぬ花を咲かす事もありし、兎角する中盡きも済み晩餐も終りて何事もなく一日を消す、内地沿
岸の航海と異なりて、船ハ終日沖にあれども四方涯りなき大海原、更に行き通ふ船の帆影も見ず
夜に入るも亦紅緑二様の燈の尙更、長汀曲洲燈が沙焚く漁火の目に入るものもなし眞に孤帆落
落至天涯、萬轉雪山路更除の光景凄涼一しはなりし此日も寒暖計正午七十二度、西南の轉風
シヨ／＼として來りたれば滿帆風を孕みて船意外に北進したるならんも一望目に觸る、ものなけ
れば余等には船其何の位地に居るやを知らず

廿三日朝來陰霧濃密所謂咫尺を辨せざるもの食事の時甲板の上に在り、衣袂忽にして濡ひ頭髮露
露を帯びて皆白し、瓦斯なれば船の周圍に珍らしき水禽の翔けるも眼か目を慰さむる便になり
て甲板、上自ら賑へとも瓦斯に降り込められてハ船員の外誰獨り甲板に居る者もなく皆薄暗き船
内に蟄伏せざるべからず、詩を吟するも咽喉ハ潤れ、將菜も倦み、「カルタ」も厭きたれば誰云ふ
どなく持て來し酒樽の蓋開んと動議出でけり、盡されば飲まぬまでの事なりと諦めの長々賛成
説ハ、再と得難ければ占守まで大切にすべしとの保存説に勝を制したりと見る間に一斗餘入の三
ッ割樽早や底盡くなりぬ、何れ劣らぬ強のもの此の如くなれば持て來し四ツ五ツの樽、四五會の
放吟高談にて憐れ傾きなん、占守に行くハ樽の屍のみと抱腹絶倒せり此日も西南の轉風にて船走
りたり寒暖計正午六十四度昨日に比し八度低落せり追々北に進みし爲めか將た瓦斯の故か

廿四日も朝より空騒ぎ曇りて更に日光を見ず昨日に比すれば暁か瓦斯の薄らぎたるのみ、總じて千島に近寄るに隨ひ霧に非ざれば曇、曇に非ざれば雨と云ふ空合にて、晴々とせし青空を見る事極めて稀に、十日間に一日も如何かと思へる、位、瓦斯に非ず雨にあらざれば、假令ドンヨリとしたる曇の日も先づ良き方とせざるべからず此日も何事もなく一日を消せしが寒暖計は午前七時六十六度正午六十四度午後四時六十六度を示し追々低落せり獨り天氣の模様は依るのみならず緯度を高めたるに依るならんと思ふ

海酌

廿五日拂曉余等猶臥床に在り、突然臘虎あり、鐵砲を用意せよとの聲耳を劈くばかり船中動揺めき渡る、船員の當直して甲板にありしもの見付て噪ぎたるなりし、余も跳起り甲板に出づれば一疋の海獸、左舷の方四五間位の距離にありて露より上を浮び出だし船に向て此方を打眺め更に逃避の色なし、其顔狗に似て毛色灰黒色に見ゆれど、果して臘虎なるか臘腸なるか將た海豹か海馬の兒か未だ分らず左れと、始め見付けし者へ臘虎なりと云はば船中の懸一層面白からんと思ひて、無暗に臘虎々々と怒鳴りし由會員森音藏の鐵砲取直して火蓋を切らんとせしに、忽ち水底に沈みたり、残念の事してけり如何にせしやと眩や居ける内、此度の船の右舷の方同距離位の

るの處に浮び出でたり、ソレと云ひさせ鐵砲を取直すや又水底に沈めり、今度又左舷の方に浮び上らざるにも限らじ鐵砲を構へ居よと注意するものありて其の如くなし居りしに果して左舷の方同じ位地に浮び出でたり、森の狙ひ定めて打放ちしに海獸の水面に二尺許りも飛び上りて再び水底に沈みたり、狙の外れしか外れぬか半信半疑の間にありしが、暫時にして又二三十間を隔て勢能く水面に浮出でたり頸の邊に鮮血滴り苦しき呼吸を爲す模様見えぬ、船中再び動揺めきぬ、針九當つた端船を御るせの聲喧しく、船員の直に端船を御し四五人乗つて漕出でしが、海獸の追追本船に遠かるのみなりしが見れば最早海底に沈む氣力もなきか常に浮び上りて轉輾反側苦む様子なりし漕ぎ出でし端船之に達し手を伸べて蹠を捕へ船内に引込みしを見て本船のものはす拍手したり、捕へ来て見れば臘虎にもあらず臘腸にも非ず大なる一疋の海豹なりし、早速皮を剥ぎ調理に掛り食に汁にして食せしが、少しく異臭あり一旦湯蒸に爲せば稍食するに堪ふ去れを乗船以來多くの梅干澤庵にて更に肉食せざれば是も大卒の美味忽ちにして食ひ盡したり、先々手初め良しと喜びぬ此夜何事にも理屈の附勝にて海獸の捕獲の目出度ければと、又忽ちにして三ツ割一樽を傾け了んぬ此日も寒暖計は午前六時六十四度正午六十五度にて終日ドンヨリしたる曇天なりし、紗那出帆日に五日目なれとも船何の邊に居るや更に分らず唯毎日無聊を感ずる許りなりけり

廿六日も朝來空掻き舞りて夏に日光を見ず、陰霧濛々として霽れんとして、再々須臾にして疎密變化す終して千島の瓦斯の長き時三日にも渡れども大抵一日の午前十時頃か午後三時頃少しく薄らぐを常とす故に終日瓦斯に閉ち込めらるゝも或る時風の吹き拂ふが如く拭ひ去りて海上二三哩の間を見渡す事もあり亦須臾にして襲ひ來れば船を去る十四五間にして波紋の動揺するも見えざる事あり、甲板より之を望み居るに十萬萬化極りなし、航海者の説に依れば千島の瓦斯は日本海より流れ來る黒潮即ち暖潮と北極地方より流れ來る所の親潮即ち冷潮と千島近海に於て衝突し暖潮の持つて來る水蒸氣の急に冷氣に遭ふて凝結する者なりと云へり、此説或は眞に近からんか、實に不思議の現象と云はべくのみ此日も寒暖計午前六時六十四度正午六十五度午後四時六十四度を示せり廿七日も前日來の陰霧未だ霽れず船中無聊に堪へ難さに時々甲板に出て逍遙するに暫時にして肩より袖口の邊まで上衣の上に恰も微の生じたるが如く眞白に露を置き眉睫鬚鬣亦凝球を垂れハンケチを以て拭ふに雨に濡ひたるが如し故に船員は瓦斯の日に常に雨合羽を着用して働居り、斯して甲板に出るも懶ければ自然船内に潜伏するより外なく白晝ランプを點し書見に倦めバカルマ將基杯を弄して一日を消するのみ此日も温度午前六時六十五度正午六十二度を示し追々冷氣を感じたり

知林古丹

廿八日早朝瓦斯稍薄らぎ左舷の方數里を隔て雪の晴れ間より一島を見る海岸波打際及び其山嶺を見る事を得山腹の一帶に雲を以て掩れぬ島甚だ大ならず余等固より其何れの島なるを知らず唯航海八日目にして始めて陸地を望見して喜ひ限りなく船内に整居せしもの皆何れも甲板に集り來り僅限鏡を取るものあり航海圖を披くものあり追々瓦斯も薄らぎ山腹も現れ出でしに船間處々に白點あり蓋し残雪の未だ消せざるもの、山嶺瓦斯の緩くが如き蓋し噴火山なるべしと云ふもあり山腹灰褐色に見ゆる蓋し硫黄なるべく、全山禿たるが如く見ゆる樹木なき證なるべく、彼の島に多分川らしきものなかるべく、イヤ彼處に白く見ゆるの瀧にあらすや杯甲品乙許果しなかりしが、兎に角船員に何の島なるやを確むべしと思ひて問ひしに船員中運轉手鈴木孫作及び水先として乘込みたる吉田長太郎の兩氏は何れも曾て水産會社の千島丸に乗込みて千島航海に經驗ある人なれば山の形狀其他を見て多分「テリンコタン」なるべしと答へぬ「テリンコタン」と「シマスコタン」の北西三十哩餘を隔てし千島群島の一にして島と云はんより海中の一高山にして海岸より直に屹立して圓錐形を爲し特に小島なれば固より人の棲み得べき處に非ず、何れ兎もあは「テリンコタン」まで來りたれば夫より「ニカルマ」島を通り過ぎれば則ち「シマスコタン」にて其距離の遠からざるを知り心も一しは勇ましくなりぬ、然るに生憎にも此日午後より西北の暴風起

り一時の雨さへ加はりて激浪怒濤、船を蕩殺し甲板に打込む中、霰の如し、之と同時に今更で残れ渡りたる濃霧も何處より潜み出けん再び猛勢を逞うして天地を覆ひ、舟の島を距る事遠からざれば暗礁の恐れもあるにや針を元來し西南に取直し急ぎ沖合さして逆航しぬ

第四 時化

廿九日夜來の風力益々募りて今ハ強雨さへ之に加はり全くの時化模様と爲りたり、船ハ西南に逆航せし事廿哩餘なりと聞きしが、折角知林古丹近傍まで近きしものを又再び遠ざかりたり船の動搖甚だしかりし爲め飯を炊く事もならず粥を煮て啜りたり總じて船中にてハ動搖甚だしければ据付けし釜ハ左右に傾斜し中なる米も水も溢れ出でぬ許り中々鹽梅良き飯の獲得ぬ者ぞ唯だ帆船ハ汽船に比してハ動搖も無激に身に感せぬ様覺之ぬ汽船ハ荒き波に逆ふて進めど帆船ハ張りたる帆を風に押へられ一方に傾きたるま、波のまに、進む其代り「ボートテツキ」「下ボートテツキ」と帆を左右に變換する毎に傾斜ハ右に變じ左に換はりて今更で疲し儘の足ハ頭より高く昂り枕を屢々換へねばならぬなり斯様の事「ド」と書き綴るハ航海者の爲に一笑を博するに過ぎざれど海事思想の弱き我國四千萬の同胞中豈余の如き同病者無からんや筆の序に聊か同情を預つにん後ハ聞けば此日丁度軍艦武藏も幌筵海峡に入泊せし日にて同地も容易ならぬ時化なりしと此暴風ハ千島近海を吹通したる者と思はる、なり寒暖計ハ午前六時六十一度正午六十二度を示したり

三十日荒れに荒れたる前日來の暴風稍静まりたれども未だ全く止みしに非ず雨さへ加はり居れば濃霧濛々として船の位地も余等ハ更に分らず唯々船内に盤居して氣を焦つ許り此の如くなれば何日「シヤヌコタン」に着する事もやと思ひて無聊此上もなし午前六時六十度正午六十一度午後六時五十九度にて寒暖計初めて五十度臺に下りたり

拾子古丹

卅一日夜來風雨全く霽れたれば余も目覺むるや直に甲板に出でしが冷氣身に染みて肌に粟を生ずる許り急に外套を纏ひたり船員に聞けば未明の頃寒氣甚だしく寒暖計も四十三度に低落し雪交りの雲を降らしたる由尙船の位地を聞くに昨夜より風も風たれば針を「シヤヌコタン」方に向けたる由なるが何分にも瓦斯未だ晴れざれば針路も不明の爲め今曉六時頃船ハ「エカルム」島を距る僅かに數町位の處に突進し磯邊に白波の掀翻するをも認めし由なりしが急に針路を轉じ今正に「シヤヌコタン」に向ひつゝありと「エカルム」島「シヤヌコタン」と其距離十餘哩に過ぎれば「シヤヌコタン」に着するも程遠からざるべしと思ひて皆々元氣よく誰獨り船内に居るものもなく平生との違ひて甲板の上も自ら賑ひ暈を定て我先に「シヤヌコタン」の山を見出さんと競ひしが何分瓦斯の未だ晴れ切らぬ故僅か十餘哩の距離なれども四方唯茫茫として白布を覆ひたるが如くなりしが午前十時頃に至り瓦斯も稍薄らぐと共に船の前面に當り朦朧として瓦斯の中に山の如きもの

見えぬッレ山が見えた島が見えたの聲喧しく動揺めど渡りぬ其中追々船も近づくに從つて瓦斯も薄らぎ穿元たる高山前面に登ゆれども固より一天暗れ渡りたる晴天にも非ざる故時々瓦斯の爲に蔽はれて隠見出沒極りなく汽船なれば一瀉直進海岸に達すれども帆船の悲に倚り進んで進む故島影を目前に見つゝ容易に達する能はず夫より二時間許も過ぎて正午頃既に愈間近に至り島影を明かに認めぬ島の南北兩端に高山あり中央高原なるが如く海岸より屹立して斷崖を爲し北端より南端に至るまで一望して其涯際を極むるを得山腹際間に残雪尙囈々として在り高原及び斷崖に二帯に青草を以て蔽はれしが如く風に吹れて靡くの様見えぬ海岸波打際に一帯の白きものあり双眼鏡を採て仔細に之を見るに是なん流木なり嘗て千島群島に流木の多きを聞きしが之を見て堆積山の如く其影しさに實に一驚を喫したり其中船の頻りに測鉛を垂れて深淺を測り同島北西岸少しづつ灣形を爲したる處に錨を投せしに實に午後一時にして其時余等の喜び何に譬へんか拙筆に其十分の一も述べ難し

第五 地勢

捨子古丹北西灣に錨を投するや直に上陸に取掛りたり最初に馬場氏一行の硫黄採掘の場所を探求するの第一の事業にてありし故に本船より端船を仰るすや兎に角四五日分の糧食及び衣類些細なる小屋掛の道具杯を積込み馬場氏始め一行の事務員其他八夫十數名及び報效義會より白瀬區

目黒廣吉の兩人を先發探檢の爲め上陸せしむるに決し端船小にして多數乗込む能はざれば其餘の翌日上陸する事と爲し目黒白瀬の兩人も肩に背囊を負ひ銃を携へ食料に兩三日分のビスケット、繩、針の類を持ちたり端船、本船を離れ陸に目掛けて漕ぎ行さしが陸と本船との間十二三町もありて中々に遠し余等へ絶えず双眼鏡を手にし端船の行方を眺めしが海岸を見るに波靜かなれども處々に巨岩大石の横はれるものあるが如く端船の適當の繫場もなきにや彼方此方に漕ぎ廻る様子なりしが餘程北に進みて漸く繫場を尋ね當てたりと見え皆々上陸したる様子にて赤毛布を纏ひたるもの環濱邊を彷徨を見受けぬ暫くありて數個人影遙かなる斷崖を草を分け、蟻の道くが如く高原として登るを見たり蓋し硫黄採檢の人々何かの山をさして採掘の現場を尋ね當てん爲の旅立ところ見受られぬ

「シヤスコマン」の島甚だ大ならずと雖も長さ大凡十二里幅廣さ處四里狭さ處半里と稱す特に高山の頂の概ね瓦斯を以て掩はれぬ何處を當てと定めなく硫黄採掘の現場を探求せんと欲す豈多少の至難なしとやせん尙地理學的に今少し「シヤスコマン」の地勢を詳説すれば南端の東經百五十三度四十四分北緯四十八度四十三分に起り南々西より北々東に長く東經百五十四度二十三分北緯四十九度十二分に終り南西の北東兩端に高山あり北東にあるを「マツチシリ」と云ひ南西にあるを「シヤスコマン」と云ひ中央の一体に高原にして南北兩端幅廣く中央狭く瓢形を爲せり

午後五時頃に至り珍らしくも天気晴れ始めて日光を仰ぐ事を得たれば熱心に島の形勢を見且つ今日迄世に有觸れたる「シヤスコマン」の書類を見るに何れも島の兩端にある高山より盛んに噴煙を爲す由記しある故之を見るに北東にあるものに更に噴煙を見ず西南にある者へ或は噴煙を見紛ふが如きもの見ゆれど又瓦斯の緩くかとも思はれ特に井口弘一と云ふ人の「シヤスコマン」硫黄礦の取調書に「船より望んで山の半腹黄色を帯び一見して其硫黄たるを知り噴煙絶えずとあり而して今之を見よに明かに噴煙と見るべき者もなく特に山の半腹黄色を帯びたりとの形容へ如何なる場所を指したる者か更に分らず最も不思議の事なりと思ひ馬場氏の如きも畢竟此井口なる人の書類を信じ多少の資本を投入して來りたるものなるが此島如何なる場所に硫黄のある者がと思ひて疑團頻りに胸中を往來せり

〔彼是する中に日も漸く暮れなんとし海岸を見渡せば砂濱に白きもの見えぬ能く之を見るに上陸者の中硫黄探検に向ひたる人の外へ留りて小屋掛に従事せし者にやあらん其白き者の即ち小屋にて「ツツク」を天井に張りたる者の如く其中焚火をも爲せし者か白煙の天に炷するをも見其傍に二三人影もありて荒漠無人の「シヤスコマン」幾許の星霜を経て今日珍らしくも此に人類の小屋を作り此に寝ね此に食する事と思へば一種異妙なる感も引起りて船に居る者も自ら氣強き心地もせられ入に入れバニケ所三ヶ所にも篝火を焚き中々に賑かなる様子蓋し流木山の如く薪材思ふ儘なるに依るならん此日寒暖計午前六時五十八度正午五十六度午後六時瓦斯齊る、に依て六十度に上りたり

第六 海草

八月一日拂曉余等未だ臥床にありしが陸へ行きたる端船歸り來り又直に陸に行く由にて上陸の便を得る旨告ぐるものある故余の勿慌起き出て朝食を喫せず直に身仕度にして掛り會員中小野藤二郎、森音藏の兩名を伴ひ端船に乗じ陸地に向ひしが追々陸に近くに従ひ海草類の密生甚だしく尤も多き「俗に「カイロツプ」と稱するものにて食用に用ならざれども多き處の海底岩石に密生して夫より長く水面に浮び出で其尾の又蜿蜒海面に流れて潮の去來に依り東西南北に其向を換へ長きもの數十間に至るもあらん海面之れが爲に殆んど莖を布きたるが如き所あり若し一度端船を此中に入る、時の船底膠し櫂も櫂も用を爲さず進退谷まる事あり故に端船の成るべく「カイロツプ」の海草を探して漕行くを常とす海岸に到れば昆布に「猫足」と稱する類其他裙帶菜、鹿角菜、石花菜、海苔及び食用にならざる海草類岩石に密生し海岸沙濱に此の打上げたるもの山積腐敗して一種の臭氣あり元來「シヤスコマン」なる名稱の「シヤス」と「土語昆布の義」コマン」と「土語」場所と云ふ意味にて「シヤスコマン」の昆布場と云ふ意義なれば定めし海草類豊富なるべき旨曾て探拏抄那にて同地の高木重吉と云ふ土人より聞きしが果して其言の虚ならざるを證せり

船陸に着きたれども朝飯前の事なれば馬場氏一行の小屋掛の處に到り朝飯の饗を受け其折人夫等が採たりとて海苔の汁の馳走になりしが其海苔の内地の産と全く異にして何年となく人の採收する事もなくして岩石に生じ海水に浸し居ること故其厚き事昆布の如くなれども香氣と云ひ味と云ひ少しも内地の海苔に異ならず汁に煮れば思ふより軟にして香水高く味も中々に佳し

流木

朝飯終れば馬場氏の一行も兩手に分れ一方は東北に一方は西南に向て硫黄の探検に派出する由にて昨日一日、半日、探検に費したれども更に硫黄に見當らざりしと云ふ余等も直に丸飯を腹にし小野、森と共に西南の海岸に向て土人の舊村落を探さん目的にて出掛たり脚絆を着け草鞋を穿ち各銃を肩にして海岸を辿り始めたり小屋より十町餘の間は砂濱にして歩行も困難ならず左の大凡百廿尺位もあらんと思はる、丘陵にして傾斜甚だ急に斷崖を爲し浪打際より其崖まで大抵四五百尺もあらん海岸浪に洗はる、處の小砂にして其より雜草繁茂して遠く斷崖の上に達し草の長さ人の肩を没する位のものあり小砂と草と接する處流木最も多く太き一抱もありて長さ二三間根の儘にて打上げられ或は兩端に錨を入れて板に挽く許のものあり角なるもの曲れるもの枝儘のもの偃臥錯綜堆積し五六尺位の堆を爲し木材の置場と言はんか材木間屋の店と云はんか實に形容にも言葉なし中に船材の破、船の櫓及び北海道地方にて漁網に用ふる浮木「アハ」と稱するもの

杯あり、之を見て一の疑團起りたり元來千島西北岸の海潮は東北より西南に向て流る、者と聞きてしに北海道地方のもの此邊に流れ着く如何なる故なるをと思ひ後に泰洋丸の船長鹽田氏に之を質したるに北海道宗谷海峡より東北を指して流る、一の海潮あれば此潮に連れて斯く流れ寄りたるものと答へたり併し全体の流木は千島群島中も東南岸太平洋に面したる部分に絶て無くして西北岸洞科海に面したる部分のみ多ければ蓋し黒龍江沿岸滿洲地方より主に流れ寄りたる者ならんと思像せらるゝなり

第七 冷潮

小屋掛場より十五六町も歩みしに突然傍の叢より一疋の狐飛出でぬスハ狐よと三人振向きしが狐も此方の聲を聞付けたる者か立たる儘首を傾け此方を見詰て敢て迷もせず其距離三十間位もあつらん今少し近くへ寄せよと言ひたれども逃げられて其迄なりとて森の鐵砲取直して一發放ちしが狙外れしと覺しく一目散に駈出して忽ち見えすなりぬ残念の事してけりと咄しが白登狐狸徘徊すと口真に此事にて狐も余等三人を見し時未だ見し事もなき異形の動物何物ならんと思ひて麻や吃驚したるならんか狐の何物を食するやと考ふるに海岸小高き處にまで往々雲丹の目殺おるを見れば多分狐の食したるものなるべく何れ海岸に出で、食物を求るものと思はるゝなり
午前十時頃よりハ瓦斯も舞れて珍らしき晴天となりたり余等目に觸るゝもの何物も珍らしからぬ

のなぐ野草より其邊飛び通ふ鳥類まで往々内地の者と異なれば色々の品評して西南の海岸にして飽まで通りたり海岸岩石の絶て火山作用の集成石にして随分巨岸怪石累々たる處もあり行く大なる岩ありしが其陰に群鴨の游泳し居りしを見付し故岩陰より余と小野と散弾にて一齊射撃を爲せしが一羽程留りたり其食に誠能き獲物よと思ひたれども波打際より二十間位の處に流れ居り今に波の爲に海岸に寄せらるゝならんとて暫し待たれども中々に寄る模様見えず三人氣を焦ち居りしが森音蔵の中々の元氣ものなれば余の飛込み游いで取來るべしアノ鴨を食はされば殺陣悪しと罵りたり其元氣の衰けれど何んせよ寒暖計の五十六度にて内地にて十一月末の氣候特に此邊の海水の冷き事非常にて十分とも手を入れ居る事叶はぬ程なれば鴨一羽の爲に感胃を引起すも無益なればと止めたれども中々に聽入れずハヤ上衣の釦を外しに掛る故然らば暫し待てよとてマツチを出し流木を集めて焚火を爲し火の燃え上りたる後飛込ましめしが早速一羽を持歸りたり五跡を見るに頸より下恰も茹上たる鮎の如く赤くなりて裸へ居り余と小野の乾きたる手拭にて摩擦しやり焚火に暖めたるにて心地復りければ鴨を携へ焚火をも其儘に亦た西南として進みたり再び孤に出遭ひたれども之をも打外しつ傍の草の中に迷込みて其隠れたる處草叢を見當り二三發放ちたれども應へたる模様更になし氣を焦ち草を分けし其處に行き見れば當ぬも道理草の人の丈よりも長く根に居る孤に向て草の梢に發砲したるなりけり其中孤ハ又飛出し跡逐ひ

駈けたれども又姿を失ひぬ斯くしてハヤ二十三十町も歩みたらんと思はるれども更に土人の舊屋らしき者も見當らず夫より又々進んで行きしに海岸の砂濱全く盡きて大石累々たる處に到りぬ大石を攀りて降り登りて下り漸く行きしが終に巨岩、海に突出し到底攀登すべからず海面を見れば水色藍を湛へて其深知るべからず山を廻りて向ふの海岸に達せんとせしに巉巖峭壁數十丈屏風を立てたるが如く亦攀登すべからず已なく元來し路に引返ししが足元疲れ喘ぎし前の險惡なる岩石を渡りて漸く砂濱に出でたり時已に正午に近ければ儼かなる流れを見付け見るに其水も清き様なれば此に憩ひて流木を集めて焚火を爲し其中にナイフにて例の鴨を料理するもありて一人串を作れば一人ハ之を炙り丸飯に入れて來し味噌を付け舌打して食せしが土人の舊屋の如何なる處にありや多分海岸波來らざる處なるべしと思へど更に見當らず之を見て他日の資料とせんと思ふに遊獵の事なりと少しく失望せり食事終らば又々勇を鼓して探求せんとて暫し疲を慰せしが、暖き日に非されども流石の險難なる處を歩みし爲か總身汗滴り紗那出發以來船内に發居し身体の不潔云々許りなければ皆々赤條々になりて水浴を爲せしが溪水の方却て海水よりも温かにて誠に心地よく積りし垢を洗ひ流したり

第八 土人舊屋

食事を爲し居る間に遙か向ふなる斷崖を眺めしに半腹に少々の杭の打ちあるが如きもの見えぬ初

めの枯木の根かとも思ひしが能く思へば立樹なき此島に固より斯程の根株あらんとし思はれず
 幾歳月の前人類の此島にありて何等かの必要の爲に打ちし杭の端なく今日余等の目に觸れし深
 き因縁ならめアレ極めず置くべき者かんとて食事も刃々に終り又々銃を搦ひて歩み出でぬ、斷
 崖の下に到り仰で見しに正しく杭なり、攀登して復檢せんとするも路なく草深ければ何れよりせ
 んかと思ひて左思右考せしが少しく草の薄き處を求め銃を杖つき草を踏分け登りしが大なる岩の
 傍に出でぬ見れば向ふにも大なる岩ありて其間土壘陥没して深き溝を爲し其幅五六尺に過ぎざ
 りとも橋なれば固より渡るべくもあらず、見るに奇と云はんか妙と云はんか彼方の岩が根に一
 本の流木斜に横はり其れに架して徑五六寸の流木此方の岸に横はり流木と流木との怪しげなる紐
 にて縛りありぬ正しく人造のもの宛然たる獨木橋、手を拍て喜びたり是れ舊土人の道路に非ざる
 か益々勇を鼓して進めんと罵れども如何せん其橋の已に幾多の星霜を閱せし事なれば腐朽用を
 爲さざる者なるやも知るべからず俯して下を見れば深き一丈許り岩石累々として底暗ければ過つ
 難き事をも恐しく迂闊にも渡られず暫し躊躇しが斯てあるべきに非ざれば試に鐵砲の裏尻もて叩
 きみるに左まで腐朽し居るとも見えぬ故小野龜二郎の真先に岩に傳ふて橋を踏み忘る向ふへ飛越
 えたり總じて余も森も難なく飛越之杭を目前に登りしが杭の打ある處の傾斜最も急にして直立し
 て歩まれねば手を以て上なる草を握へて一歩々々に進みしが杭の論なく人の打ちたるものにて

其傾斜急なる處に恰も昔時人の歩みしかの如く草に掩はれ居れども儘に土に凹ありて其痕跡見
 え道路に相違なければ一層勇氣も加はり喘ぎ／＼登りつめ草を分けて進みしに雜草叢も生茂りた
 るに流木を交叉したる屋根の如きもの見えぬ、思はず快と絶叫し更に進んで其處に行て見ると
 屋根の草落ちて其骨を露したるにて是れ庇の部分なれども本屋の方の未だ屋根も崩れず其儘な
 り能く／＼家屋の構造を見しに土を三尺位も掘り下げて兩方に柱を建て棟木を置き土を掘下げた
 る所より直に梁を置列へ枯草にて屋根を葺き其上に土を培ひたれば屋根の上にも雜草夥しく繁
 茂して少しも屋根と見えず、本屋を横いて庇あり入口三重にして且二形を爲し、庇は西に向
 つて入り南に向て本屋に入る、蓋し風の正面の入口に吹付くるを防ぎしものならん總体室内に入
 るに必ず地面より下へ降らざるべからず余等も兎も角も室内に入らばやと思ひて庇の中へ降り
 べ庇と奥室の間に扉あり其丈三尺五寸幅二尺七八寸もあらん釘にて嚴重に打付ありしが之をコサ
 明け身を屈め体を燃て漸く出入する事を得べし中へ入しに唯暗黒にて何物も見えずマツチを動し
 たれども不充分なれば必ず窓あらぬ筈なしと思ひ屋根に登りて探せしに果して一尺四方許りの窓
 わりしが草の爲に掩はれ日光を遮蔽し居りし故草を掻分けしに初めて室内も明にして能く見えぬ
 室内大凡六疊位ならん中央に燈を切り其上に窓あり四方土を掘りたる處に少さき木を列へ隅に
 柵も亦窓の如きものも見えぬ、庇の思ふに食物を調理し若し便所の備へる此處にありしなら

ん奥室に更は是等のもの見えず

第九 土人の遺物

偶然の事よりして土人の舊屋を尋ねたれ、何にても紀念の爲に遺物を得んと思ひて探したれどもあるもの、燼に燃殘の薪及び貝殻海獸の骨と覺しきもの其邊に散亂するのみにて何物もなし、平生狐の柵處と覺しく且つ土人の此地を去てより已に幾多の星霜を経し今日なれば全く崩落のせされど屋根も半の腐朽し苔蒸じ土微で室内陰々とし立て、頭天井に支へ屋根裏の草根叢茂して、頭を垂れ中々に心地悪けれ、匆々にして出に此近邊に他より一體に草長くして格別に自立、處々に少しく小高く塚の如く見ゆる、總て土人穴居の跡の如くなりし、草を分々進みしに時として深き溝の如きものへ陥る事あり見れば此溝の穴居の周圍に廻りありて恰て排水の爲に設けたる者の如く中々用意の周到なるに感じたり、穴居の傍まで行けども一體に草にて掩はれ居る故判然其との分らず此處も穴居にあらざるやと小高き處に上り思はず窓より足踏落す事もありし、其數大凡十三月もあらんか中に、全体潰れ落たるもあり其儘なるもあり遺物を得ん逆何れも扉を、明一度の中へ入りたり大小の差のあれども構造の皆同一なり、其後一の穴居にて土人の用ひたる小刃を拾ひたり其より追々探し最後に見たる、其中にて最も大なる物にて或ひは酋長の家かと思はれ家根の半の朽落ちしが爲に室内却て明白に見え、ツンの明き燧及び辛子、ツンの入りたるが如き空個杯轉りありて片隅に燐臺あり棒もて之を掘り起せしに青銅製の湯沸の如きもの及び聖像挾(眞鍮にて中をくりぬき希臘教にて用ひるもの)其他銅製の匙、皿及び陶器の壺の破杯出でしが何れも外國製にて無論西亞より輸入したる者なるべく外に珍らしき日本製のマツチ一箱ありし其他藥包一個硫黃一塊及び主人の製作せし者と見ゆる舟釘にて牡蠣を割に使用するもの(内地の者と同じ製なり)等にて此等の皆拾ひ取りて持歸りたり土人の舟釘効用の中々に多く家を造るにも大切なる棟木を抑る等には皆船釘を用ひ其他堅牢を要せざる扉杯を作るに大抵木釘を用ひて巧に製作し居れり、木材の皆流水にて之を彼の險惡なる斷崖を運び上げ粗惡なる道具もて家を造るの勞苦中々に思ひ遣らる、也飲料水の如何になしたるならんと思ひして僅か離れて一の溪流あり見れば其方に向て路あるもの、如し之を辿りて行さしに傍に平かなる草原ありて今を盛りと菖蒲の花咲亂れ居りたり之れ昔時土人の植ゑし彼等の花園に非ずやと思ひて何んなく床じかりし谿に傳ふて行きしに流れ少なれども水清く且つ石もて堰留あるが如く無飲飲料水に用ひたるならん此處まで來し路亦向ふ岸へ通ふが如く見ゆる故之を辿りて行さしに矢張穴居の跡にて餘程年數を経し者と覺しく皆崩れ落ちて中へ入るべき様なかりし是にて土人の舊居も見終りたり、土人の何年以前まで此島に栖息し居りしやを考ふるに明治九年開拓中判官長谷部辰連尋汽船函館丸に搭して占守に赴きし事ありて是れ明治八年樺太交換條約後最初の航海にてあり

たるが如き空個杯轉りありて片隅に燐臺あり棒もて之を掘り起せしに青銅製の湯沸の如きもの及び聖像挾(眞鍮にて中をくりぬき希臘教にて用ひるもの)其他銅製の匙、皿及び陶器の壺の破杯出でしが何れも外國製にて無論西亞より輸入したる者なるべく外に珍らしき日本製のマツチ一箱ありし其他藥包一個硫黃一塊及び主人の製作せし者と見ゆる舟釘にて牡蠣を割に使用するもの(内地の者と同じ製なり)等にて此等の皆拾ひ取りて持歸りたり土人の舟釘効用の中々に多く家を造るにも大切なる棟木を抑る等には皆船釘を用ひ其他堅牢を要せざる扉杯を作るに大抵木釘を用ひて巧に製作し居れり、木材の皆流水にて之を彼の險惡なる斷崖を運び上げ粗惡なる道具もて家を造るの勞苦中々に思ひ遣らる、也飲料水の如何になしたるならんと思ひして僅か離れて一の溪流あり見れば其方に向て路あるもの、如し之を辿りて行さしに傍に平かなる草原ありて今を盛りと菖蒲の花咲亂れ居りたり之れ昔時土人の植ゑし彼等の花園に非ずやと思ひて何んなく床じかりし谿に傳ふて行きしに流れ少なれども水清く且つ石もて堰留あるが如く無飲飲料水に用ひたるならん此處まで來し路亦向ふ岸へ通ふが如く見ゆる故之を辿りて行さしに矢張穴居の跡にて餘程年數を経し者と覺しく皆崩れ落ちて中へ入るべき様なかりし是にて土人の舊居も見終りたり、土人の何年以前まで此島に栖息し居りしやを考ふるに明治九年開拓中判官長谷部辰連尋汽船函館丸に搭して占守に赴きし事ありて是れ明治八年樺太交換條約後最初の航海にてあり

じが此時まで、占守に奮士人の栖息し居りし頃にて彼の開拓使の官吏と士人との間に問答せし記録を見るに左の如き事あり

明治九年七月六日占守郡第一島酋長スーロビエフの話

前略「オンチコマン」「シヤヌコマン」兩島に在る者皆此島に來會して去就を決すべき筈なるを何故か未だ來らざれ共頃日ハ既に居島を發したるならんと想像す其兩島に在る老人等に協議するに非ざれば余等之を擅斷する能はず故に本年中に此議を決定し置き而して明年諸君の來るを待て確定せんとす且此去就の事たるや不日來會する老人等ハ如何の思想あるを知らずと雖も余等の思考する所に依れば假令亦く此地に就かん事を欲するも猶從來の如く更に日本より我宗教僧侶の隔年に回島し來らん事を願ふ若し然らざれば或ハ魯領に去らん事を欲するや亦量るべからず云々

是に依て見れば明治九年頃早く已に此島を去りたる者と思はるゝなり

第十 樹木

土人の舊屋を二見し終りたれば是より西南の海岸に出て歸路に就かん豫定にて進みしが左ハ「ロシヤ」山高く聳へて山嶽が斯の爲に掩はれ右ハ一望餘涯なる洞窟科海にして幸にも此日瓦斯晴れたれば「エカルマ」「チリンコマン」の二島白浪掀翻の中に眩立雲霄を摩し中々の景趣なり余等三人ハ固より路をたもめらぬ高原を歩むことなれば何れを當てとも定めなく或ハ急水を渉り或ハ草原を歩みしが草原ハ何れも無草茂して低き草を踏むに難く或ハ一草一木ハ

樹木ハ五葉松の地上に伏して横に生じ之を遠見するに草を紛ふ計り異島の彼方此方に飛ぶ通りのが天地無窮ノ耳に聞ゆる者もなく目に觸るゝ者もなし時已に午後六時を過ぎ斜陽將に碧淵の中に没せんとして三個の人影長く地に曳き歩みて一深潭の傍に行きしが見れば兩岸を以て前がたが如く斷崖絶壁下るべからず巖々として岩を擧つゝ聲聞ゆるハ急流激して瀧を爲り白練直下海に注ぐものなりけり絶して此島の急流ハ海岸斷崖の處に至れば必ず瀑布を爲りて海に注ぐ者を知るべし余等此に到りて路通せず強て對岸に到らんと欲せば已むなく急源に溯り山を迂廻して進まざるべからず日將に暮れなるとし食物の準備も非ざれば此より元來し路に引返せしが海岸の若石割立して到底下るやうも非ざれば再び舊士人の村落に歸り其處より斷崖を下り又元の如く海岸波打際を傳ふて來りしに此日余等上陸の後大尉ハ水兵二名を偕れ上陸し海岸ハ急流の瀑布に「オシヤ」關東地方にて「オシヤ」云々云々云々魚澤山居り之を捕へたる由に之ハ數尾を手にし居るに連ひ余等の土人の舊屋を探したる事を話し拾ひ取たる土人の遺物杯を示せしに大尉も一見したしと云ひ其處より土人の舊屋までハ程遠からねば悉く其場所を指示し余等足も疲れたれば其儘分れて小屋に歸りしに幸に本船へ歸る端船居りし故之に乗て本船へ歸り大尉等ハ遅くなりて海岸の小屋に泊りしが生憎にも此夜大雨にて小屋ハ唯「ツツク」を張りたるのみなれば雨洩りて野外を襲ならず睡らんとするも雨に濡れ毛布を頭から被り一夜呻吟して夜を明したりと云ん此日表

観計午前六時五十七度正午五十八度午後七時五十六度を示せり

山行

八月二日正午まで本船に居りしが船長の土人の齋屋を一見したしと望み余に東道して上陸せずや
と勘ひ余も本船に居りても無聊なれば水兵其他数名と共に上陸に決し本船より望見すれば断崖の
上雜草特に濃密の處の土人の村落にて一自分明なる故此の度の端船を直に其の断崖下に繫で上陸
し暫し其途を道進して直に歸路に就き亦海岸を辿りて小屋に到りしに皆昨夜の雨に濡され安眠
もなから其日の夜間冷氣も甚だし故自ら薪を燃す事多し烟の爲に皆目を腫らし苦しき様子なりし
特に甚だしき馬場氏の一行が硫黄探検に向たる中西南「ロシヤ」の方に向ひたる其日の
中(八月一日)に歸りたれとも「マツチシ」山東北の方に向ひたる路遠くして夜に入り歸路を失
ひ特に瓦斯さへ起りたれば四方唯暗黒にて其中に大雨篠を突くが如く降りしきりて進退谷まき毛
布等の旅具もなければ食物の盡飯の爲に持行きし丸飯二三個あるのみ同勢六七人の皆飢餓波
勞交り途方に暮れ雨に撲たれて突立たる儘如何とも詮方なく露宿に決し山上の流木もなければ
五葉松の枯枝杯を架めて漸く焚火を爲して暖を取り儘かに寒を凌ぎしも昨夜より晩食もせざ
れば疲勞甚だしく困頓し居る間に此方小屋の方にて一行の歸り來らざるに痛く心配し人夫に丸
飯を持たしめ迎の爲に人を出したるに避ひ漸く蘇生の思にて歸り來りし由にて余等小屋に到りし

時が昔歸り居りしが目を腫れ疲勞の体にて困難の様見えたり

第十一 泰陽丸出帆に決す

硫黄探検者の上陸以來日に三日に渉り北に「マツチシ」山より南に「ロシヤ」山まで種々艱難
を冒して採掘の場所を探索したれども更に見當らず今詮方なく「シヤヌクソン」を見限り人夫其
他も引上出帆に決したり去るにても井口弘一氏の探検に依れば山腹硫黄露出して黄色を露はせ
りとあるに今馬場氏一行が屢々危難を冒して探検したる結果一塊の硫黄礫にも見當らずと云ふ其
差當り御嶽のみか、世に不思議の事も多かんと疑圖容易に解けざりけり、馬場氏等若し
「シヤヌクソン」にして硫黄探検の結果面白からざれば幌筵島に向て硫黄探掘に従事せん決心なり
と聞き及び居れば出帆直に幌筵島に向ふならんと思惟したり、此日の報効義會より一張の天
幕を陸上しありて獨り馬場氏等一行の小屋のみに非ざれば此日余等も一夜「シヤヌクソン」の土を
枕として寝ばやと思ひ水兵も四名程同行なれば直に杭を打て天幕を張る準備に掛れり、時已に黃
昏なりしが大尉の船長を同伴して本船に歸りたり、斯りける中此に一の心配こそ起りたれ開他
に非ず去る卅一日本船着の日、本島漁場探検の目的にて義會員白瀬、目黒の兩人を派出せしに已
に二夜を過ぎ二日も夕刻に至たれども未だ歸り來らざる事なり其間或は瓦斯に罩られ大雨に逢た
るに相違なかるべく、磯に鳴く鳥、沖飛ぶ鷗に言問を固より梨の礫の便りもある筈なく如何せし

事か、若し今宵も過ぎて歸り來ねば明日の船も出帆を極り居れば是非迎の者にて出さねばなら
 ず心配二通ならざりしが未だ天幕の出来上らざる間の別に休息する處とてなれば鳥にても
 て來ばやと思ひ銃を肩にし水兵一名を拉して北方、目黒白瀬等の向さし跡を傳ふて海岸を辿り凡
 十二三町も歩みしと思ふ頃遙か向ふなる岩角の傍に二個の人影現れぬ、日ハ已に渺茫たる海波
 は隠れて蒼靄白砂を染むる頃なれば何者なるや分らざれども人無き島なれば必定目黒白瀬の兩
 人なるべしと思ひ足を早めて進みしに暫し岩に隠れて姿を見えず又五六町も進しに漸く近づき、
 見れば果して彼等兩人にて背に背囊を負ひ左も重げに銃を杖にし足も容易に昇る様子、彼方に
 一歩此方に一歩踏眼として磯邊を辿り來れり、白瀬の如きハ已に草鞋を穿せしか素足の儘にて
 若月小沙に俯み、眼窩の凹み頭髮が亂れて顔を掩ひ衣袂濡ひ手足黒うして鬼と紛ふ計り、近いて
 食物の如何にせしと問ひしに今朝來兩人刺す所のビネケット銃に三枚之を啖みて、餘水を指し儘
 に飯を喰ぎぬと云へり何故斯く食物の準備少かりしやと問へば昨夕刻より大雨に遭ひ岩陰に潜ん
 で雨舎を爲し一夜を明しゆる内衣服皆濡ひ中なるビネケット爲に大に其處を減じ、濡ひたる
 衣服之を乾す便もなければ其儘着し居りしに何時となしに体温にて肌觸れ居る分の自然に乾
 きたりとなん、ビネケットのみにて他に喰食せん仕様もなければ豫て其の時の用意にて鹽味噌
 等小瓶二つ携へたれば時々海より昆布を採り之に藪の葉を混て味噌にて煮て食しつゝ、大に助

を得しとなん、其行程を聞きしに大凡七里位も歩みて路全之通せざる處に到り其間或ひ山に攀
 ち路を除之頗る辛苦したるが海岸に殆んど殆んど川と名くへさ程のものもなく唯一二海豹の群居す
 るを見たれども鮭鱒の漁に殆んど絶望なりと云へり、此時幸にも余等の三四枚宛ビネケット
 を携へたれば之を興へて飢を凌がしめ、銃杯を掲げて遣り勞りて天幕まで伴ひ歸り盛んに流木を
 燃やし團樂して暖を取り一夜を天幕内に明せしが、曉頃寒氣甚だしく肌に通り思はず身を縮むる
 程なりき此日正午寒暖計五十七度を示したり

第十二 渡嶽

八月三日此日馬場氏の一行も本島を引上るに決し居れば早朝より小屋の取毀に掛り余等も天幕
 其他の荷物を取片付船船にて本船に送り正午頃迄の總て同島を引上終りたり、余等の唯單に泰陽
 丸に便乗し來りたる悲さにて今より船を何處へ向けて出帆せしめんとの力なく、馬場氏と船長船
 主との間に數回の談判ありし結果の如何なる都合にや、豫て豫想せし帆艇航の水泡に歸して泰陽
 丸の直に歸航の途に就き其路すがら千島群島中「ウシウル」島に寄せて硫黄の探検を爲さんとの事
 にて明日出帆に決したり、大尉の胸中自ら成竹のありしに相違なきも余等の其協働の如何に
 纏まりしやも知らざれば、波に任せて船のまに、心も自ら漂ひ居りぬ、時已に午後五時頃なり
 しが明日の出帆までには未だ多少の時間あられどて、馬場氏の一行の船を東北灣に廻らし尙念

の爲め「マツチシリ」山を再檢したしとの事にて船を抜て東北に廻り双眼鏡を手にして仔細に看たれど巖巖突兀奇岩怪石崇々たる許り全山禿にして一の樹木なく尙北の方向に向つて山腹破裂して迷じりたるの形跡あり其色茶褐色にて數十丈の大傾斜沙礫混して墜落し來り水面爲に濁れり蓋し幾年かの前「マツチシリ」山大潰裂を爲したるに相違なきも無人の境土空く狐狸の夢を驚かしたるに過ぎざらんぬ、今日之を知るに由なし、斯くして何程慮を費やし思を苦しむれども更に硫黄を見出さず此日も已に夜に入りければ船を投じて此に一夜を明したり寒暖計の正午五十四度午後六時五十三度にて通例「マツチシリ」に縮入、縮入羽織位が適當なりし

噴火

明て四日の夜々出帆に決し朝未明東北灣を抜船して針路を西南に執り「シヤヌコマン」島に浴入て走りしが此日の朝來珍らしき晴天にて瓦斯の思か蒼空一點の雲翳なく朝暾紅を爲して波際に浮び「シヤヌコマン」西南端に來りし頃午前十時頃なりしが一天益々晴渡りて始めて千島群島を見る事を得たり「マツチシリ」「ライコケ」杯の諸群島蒼波一望の間に基布して海鳥の時に眼眸に映ずるが千島にも尙此景趣あるかと思はる、位思はず眺め暮せしに最も不思議のものこそ目に止まりぬ、「シヤヌコマン」西南端にある高山「ロシネシリ」山の巔の常に瓦斯を以て掩れしが其一帶に覆きたる瓦斯の端なく煙の如く見えぬ、曾て瓦斯に非ず煙ならんと言ひしものもありしが、疑の瓦斯の

全く晴れて事實の煙新たに掩ひぬ、船を近けて見しに眞に煙、「ロシネシリ」山の今將に盛んに噴火しつゝあるなりけり、數方の篝火一時に燃上るが如く炎烟天に漲して雲を魚し其噴火口には所謂黄色なるもの累々として堆を爲す、船内誰云ふとなく硫黄なりと叫び出し、正しく硫黄と極りて一と先船の出帆も見合するに決し、直に「ロシネシリ」山麓の海岸近く船を寄せ馬場氏の一行の直に端船にて上陸せり、噫若し此日朝來瓦斯舞れざりせば遂に「シヤヌコマン」全島一塊の硫黄なしと決し歸帆するに非ずや、山神若し靈あらば必ず其不遇を嘆するなるべし、世間豈此如き奇怪なる事あらんや、北海の瓦斯其の作用測知るべからざるものあり馬場氏の一行も漸く硫黄を見出したれば折角の望を充たし本船も是より永く碇泊に決したれば從つて余等も滯留の覺悟を爲じ、本船の亦「ロシネシリ」山麓の碇泊に宜しからぬ故直に東北「マツチシリ」山の方に廻はり此處も或は瓦斯の爲に掩はれ居るにも限らねばとて馬場氏一行の中幾人か硫黄探檢の爲端船にて上陸し其際水夫等海岸波打際に温泉の湧出するを發見し來れり是後する中夜に入り此處に投錨せり

第十三漂流

翌五日余等も温泉の湧出地を見旁々上陸の豫定なりしに朝來西南の強風吹起りて海岸に激浪砂を捲き到底端船を近くべからざれば上陸を見合せたり、風の益吹荒む模様なれば船にても右舷左舷に二挺の錨を投じて強風の備を爲し夕刻に至り風少しく風し間に昨日上陸せし硫黄探檢者の中

二名程の必要上已むなく本船に歸り來りしが、幸うじて端船を御ろし屢々潮水を浴たりとなん、夜に入りければ風力益々強暴にして雨さへ加はり殆んど時化模様と爲りたり坐蓀の恐もあればにや遂に本船の錨を抜て押合遠く走り出でぬ

六日の風少しと風ぎたれども濃霧四方に塞がりて咫尺を辨せず終日沖に漂ひ居たり、余等の船内に整伏して何事の爲すべしなし

海馬

七日に至りて前日來の強風靜まり雨も霽れ瓦斯も散じて一天晴れ渡りたり、早起甲板に出で見れば周圍の群島目睫の間にあり、「エカルマ」島、「シリコマン」少し離れて「ペリムコマン」、煙波濤池の中を指歸し得べし、而して本船の今正に「エカルマ」島の北東三哩許の處にあり、東南に當り「マヌエコマン」「マツチネリ」山の巍峨として聳へたり、風全く靜まりたれば是より本船の針を「マヌエコマン」に向けんとせり、此時「エカルマ」島東北の海岸に當り、聞慣ぬ怪の聲、波に擽て手に取る如くに聞ゆ、チー〜と牛の吼ゆるが如く又激浪の岩洞に碎けて波戰ふの音かとも聞ゆ、双眼鏡を執りて見るに何物もなし、唯海岸巨石累なり巉岩削立の處あるのみ、船員中曾て水産會社の千島丸に乗て海獸の漁獵に經験のある者あり、海馬の啼聲に疑なしと云ふ、さらば端船を御ろし漁獲に向ふべしと決し、午後後直に端船を御ろし各自に銃を携へつゝ、大尉を始め余及水兵

七名乗組みたり、本船の直に「マヌエコマン」東北灣に廻はりて待合す約束にて、錨を押し廻を漕ぎ進めり、近くに從つて啼聲益々高く凡海岸を距る一町許の所に至りしに其數凡そ二十頭位もあらんと思はる、一群此方に向てチー〜と啼きながら波に浮びつ沈みつ頭を揃て泳ぎ寄る、ス〜と云ひ様鐵砲構へしが、未だ早しと云ふもあり、疾く撃てと云ふもあり皆經驗なれば余の如きも心中唯雄壯と云はんか快意と云はんか心胸動悸する許り憚てそのみにて徒らに驚たり、其中寄り來りし海馬の余等を見るや一齊に波を蹴り泡を飛ばして水底に沈み込みたり、船中アツト云ふ許り互ひに顔見合せ、汝止めざりては撃ちたらんものを杯果ての口争の種になりしも中々に可笑しく、兎も角も船を陸に寄すべしと腕を限り酒さしが追々海岸に近くに従つて彼方の岩隆、此方の磯邊に牛の如く臥して心地良げに睡れるもあり、又四五頭の兒を育して乳を哺し居るもあり、漕ぎ進むと端船に非されば脚遅く、其中に臥し居る海馬の頭を擡て一聲高くチーと叫びつゝ、躍にて岩の上を這ひ水際に來れば高さ五六尺の岩より洶然倒に落ちて水底に沈む様其勢中々猛烈なり一疋斯くすれば其音にて皆目を覺し傍に居るもの皆飛込む、岩に居る所を撃たんとて心の急れども端船の遅く特に海岸に「カイロツマン」海草(さへあれ)漸く銃丸の達する所まで近きし頃、親の首海底に沈んで居らす

第十四 其續

親の皆海底に沈んで逃果せられとも見の流石、側ら儲ならず迷路を失ひ岩の上に途惑し居りたれば此方端船より我先に之に向て亂發し其中に端船を岩に横着にしたれば二名許の岩に道よりて銃々に思ふ處を狙て放發し、又一度海底に沈みたるものも呼吸せんが爲め間もなく頭を水面に撞るものなれば之を狙て銃を構へ居るもあり、銃丸海に入て水煙を散じ、海獸の波を蹴て水沫を飛ばし、船中より岩上より四五挺の銃口を揃へて亂發したれば大袈裟に云はば砲聲山嶽に轟ろくを云はん許り、斯くして誰の銃丸に當りしかの知れぬを兒の二頭程岩の上に登れ、親にも多少銃丸留りたれども中々一發位にて死せず又兒の中にて海中にて登れ其儘、息の絶たるもの水底に沈むもあり、故に海獸を水中にて捕ふるに全く絶息せずして半死半生の所を捕へざるべからず、此折にも一頭の見、腹部を撃たれ臍腑を出し居れども未だ死せず水面に轉輾して苦み居れば手を以て端船の中へ引上げんとし手を展すや牙を露はして噛付かんとする故一箭を考へ大尉の腰に佩びたる短剣を抜て竹竿の先へ緊く縛りて鎌の如くなし其の切先を以て腹に刺し引上げんとし一撃するや刀身の土に廻はりて刺さらず途方に暮れ居りしが其中獸の益々苦痛を感じたりと見え鮮血滴り臍腑を出して岩の上に通ひ上りたり之を見るや岩に居りし水兵駈付け手早く傍より足を捕へて倒に吊さんとせしに獸の軀を捻りてアハヤ足に噛付れんとしたれば驚て、放し銃砲の臺尻で頭を擲しに牙を刺て噛付きたり其水兵の驚き様可笑ければ船中にてハット聲を擧げて

笑ひ水兵も思直して銃丸込め頭腦に一發放ちたれば其儘息の絶えたり、親の皆迷したれども斯くして兒を三頭程捕へ端船に積込たれども見にては尙十三貫の重あるべし親の巨大なる事推して知るべし、時已に午後四時頃にて是より六哩餘の海峽を過ぎ行き本船に歸らざるべからず水兵の中に是非親を一頭捕たしとて留まらんと云ふもありたれども千島の海中々々天候測られざれば左まで濃密に非ざりし故模糊の中臍氣に「シヤヌコマン」の山影を見認むる事を得て方向も分りたれば同島東北海に達せし時已に夕陽海に没せし頃なりしが如何なる次第にや豫定の場所には船居らず、去れはとて瓦斯の爲に四方濛々たれば更に其所在も分らず已に腕も疲れたれば今より端船を漕いで本船を捜す氣力もなく、已むを得ず上陸して磯邊に一泊するに決し毛布等の寝具一枚もなければ幸に海馬を捕へたれば之にては炙りて食物と爲し流木を焚て一夜を明すべしとて船を引上げ終り、已に火を燃さん準備に取掛りしに少しく瓦斯の響聞より見れば同じ海岸三四町を隔て、盛んに焚煙の上を見し故余の駈付け其場所を到りしに流木を積んで燃やしありて一人も居らず、蓋し硫黄探検の人々此處に露宿して今しも本船に引上たる跡なりけり、此時瓦斯少しく薄らきて其目の前に本船碇泊し居り微かに帆檣を見たれば嬉しさ堪らず、飛んで歸り本船碇泊し居る旨を告げて一旦引上げし端船を亦御ろし本船に歸りしが本船と僅々の距離なれども瓦

斯の爲めに見えず本船の者も痛く心配し居りし由にて皆々喜び余等一同漁獲物を示して唯衆に語る許り其夜直に料理に掛り皮を剥ぎ肉を採り汁に煮て食せしが其美味なる事過日捕へし海豹の比に非ず肉柔かにして臭具なく恰も餓鹿の死羊を争ふが如く忽ちにして大鍋一を喰ひ盡しけり

第十五 海馬の効用

朔て八月八日とハなりぬ、硫黄探検者の中東北「マツキシリ」山に向ひたる分ハ已に歸り來りたれども「ロンキシリ」山に向ひたる一組の安否未だ分らず元來去る四日不意に強風吹起りて船ハ斯く沖合に漂ふ者との夢にも思はず本船より直に迎の解を出す約束なりし故同勢八人にて携ふ所の食糧の儘に米五升と「ビスケット」三三十枚あるのみ、何條四日間の食糧を支へ得べき非常の苦を爲し居るならんと本船一同の氣遣ふ所にてありし、去れば此日ハ早朝直に食糧を積込み「ロンキシリ」の方に向けて解を出したり、朝來濃霧にて上陸するも何の興味なければ終日船中に在りて昨日捕へし海馬の料理に掛り皮を剥いで鹽付として貯藏し肉と骨とを切放して貯へしが肉ハ四斗樽に充々たり、皮ハ左まで高價の者ハ非され北地にて之を細く割きて繩類の代用と爲す麻繩葉繩ハ嚴寒に凍りて折斷すれども海馬の皮ハ此事なしと云ふ其他土人ハ此皮を以て船を造る又内地なれば夏季の敷物にハ一廉のものなるべしと思はる、何を食するにやと思ひ胃の腑を割て見しに乳のみにして何物もなし、聞けば生産後一ヶ月位を經しものならんと云ふ、しかも尙

鐵砲の臺尻に嚙付て齒痕を存したり、彼の親如何に巨大にして且逞しきやを想像せしめぬ、夕刻に至り又々風起りて硫黄探検者の迎に出でし解も歸る能はず本船も亦安全に投錨し居る能はぬ故例に依て錨を抜て沖合に走り出でたり

將來の方針

翌九日に至りて瓦斯未だ辨れされども風少しく風たれば朝より針路を「シヤスコマン」に轉じ島に近きたれども何分四方濼々として白布を垂れたるが如くなれば解も何處に居るや更に分らず儘に發砲して島の位置を知るのみ、船の右舷若くハ左舷より海面に向て空砲を發すれば陸地の方位よりハ必ず反響を起し來る故之に依て島の位置を知る、瓦斯の中にて陸地を捜す最も簡便なる方法にて千島航海にハ必用の事なり朝より頻りに空砲を放ち喇叭を吹き本船の位置を報するに怠らざりしが午後に至り漸く附歸り來れり、聞けば果して硫黄探検者の一行二日間許にして食盡さんとし、しかも波高くして本船の帆影も見えされば追々心細く遂に二日間許ハ昆布を採り來てハ汁に煮、其中へ米一合位を入れて粥と爲し啜り居りしも本船見えされば或ハ數日前の強風にて難破したる者に非ずやとの疑も亦り遂にハ後竟留都たるを免れざらんかと一方ならず心配し居りし際料す食糧を持って解行さし故、人夫の如くハ實に歡天喜地御遊に出で、思はず躍り狂ふもありしと云ふ、而して探檢の結果ハ愈々「ロンキシリ」山に硫黄あるやにて探掘に取掛るに決し殘る所の

人夫事務員も上陸し採掘の器械小屋掛の道具等も皆陸上し大凡三四週間採掘の見込の由にて其間無論本船の碇泊すれば余等も愈々滞留に決したれども借て其先き報效義會十餘名の者の如何に針路を執るべきや、何にせよ單に便乗者として來りたる事なれば船を思入塲所へ乗り廻す事叶ぬ勿論何かに付て不便多く又此の日數間會員と馬場氏一行の關係を如何にすべきや未定なれば萬事馬場氏とも談判の上決定すべしとて大尉の直に上陸したり

翌十日珍らしき晴天となりたり大尉の馬場氏と協議を爲し歸り來るならんと思ひ居りしに解のみ歸り來りて大尉の陸に留りたる由なり此日も亦解の八夫を乗せて陸に行き船中何にぞなく忙しくなりしが余等には直接の關係なく寧ろ將來船の進行に俱れて此方も方針を定めざるべからざる故左思右考一日を消したるのみ

第十六 天候の變化

八月十一日此日の珍らしき天候にて朝來一天晴渡が特に南風吹荒みたる爲め風につれてソヨソ腰を送り來り急に上衣を脱する程に感じたり寒暖計を見れば正午七十四度上昇して平日より二十度程の差あり紗那出帆以來同様なる暖かき日の初てなりし、風強く波高き爲か此日の一回も解通はず陸と本船との通行も絶え余等も終日船内に潜みたるのみ、夕刻に至り又々瓦斯起りたれば寒暖計も忽ち五十四度に低落したり、總じて千島にては如何に晴れ渡りて暖かき日にても一度

瓦斯に蔽はれては忽ち冷氣になりて春より冷水にても浴たるが如くツクツと寒くなり、顔にも冷風吹き付りれ手足も何んぞなく濕る様覺えて其心地の悪さ云ふべき様なし、併し追々慣るれば其感じも段々薄くなるなり、斯くして此日も大尉の遂に本船に歸り來りしが夜に入りたれば風波益々悪しく本船の又錨を抜て沖合に走り出でたり

沖に漂ふ

十二日朝來瓦斯に閉込られ晝頃に至りて漸く薄らぎしが見れば本船の「エカルマ」島の北方沖に漂ひ居りて夫より「シヤヌコタン」に針路を向けしが着せし頃已に夜に入て何事の爲すべきなく其儘碇泊したり寒暖計は正午五十二度にて通例なりし

十三日正午頃大尉も漸く陸より歸り來り馬場氏と協議の筒條二三ありたれども少しく要領を得ざる所おれば何れ馬場氏の一度歸船するを待ちて能く熟議を爲すべしとて只管馬場氏の歸船を待ちたれども此日も遂に來らず夜半より又々濃霧起り風波荒れて本船の錨を抜て沖に出でぬ

翌十四日晝頃に至りて漸く針を「シヤヌコタン」に向け同島に着し投錨せし時已に夕陽海に没せし頃にて解を出す事ならずして其儘碇泊せしが此日も正午寒暖計五十四度、數日來の天候不良なる實に氣の焦つ事なれとも何んにせよ帆船の事なれば一朝風波荒出で、汽船の如く緩急立所に應ずる能はず特に海底の細沙なれば錨爪弱く一度激浪の爲に陸地へ吹き寄せらるゝあらば危険

云ふべからず、斯く毎日の如く沖へ逃げ出づるも無理ならぬ事にて是非もなし

十五日に前日來の風波も収まり早朝島より解來りたれども馬場氏尙は未だ來らず、聞けば解來りたる所より馬場氏一行小屋掛の場所まで海岸十數町ありて其間巨岩大石龍蟠虎踞容勿に涉るべからず又解を彼方に廻はさんとするも其磯の波高くして舟着悪しく爲に斯く馬場氏の來船遅延し居るとなん、解の荷を積み直に島に行き馬場氏を伴ひ來らんと約束にて漕出でたり、船にての已に飲料水に缺乏を告ぐる頃となりし故今日の如き風波静かなる日の容易に得難ければとて飲料水の汲取を始めぬ、本船に備付の解を卸るし報效義會の者も八名許り手傳水桶等を積んで彼の「ヤマメ」の居る深布の麓に行き余も久々にて上陸し磯にて海苔を採り水にて身体を洗ひ焚火なをして暖まり終日樂く暮せしが特に面白かりし例の瀧壺に「ヤマメ」澤山居りて左程深くもあらね、膝まで進入て下流に追下し下流の流れ二筋に分れ居りて一方を石や草にて堰留れば水涸れて手にて捕へ得べし石り下回に手を入れて扱れば濺測指取に觸れ數尾一時に捕ふる事あり大なるハ七尺寸より五六寸にて六十尾餘を捕へ、海苔も岩より堆積取るなれば瞬間に桶に二つ程採り集め土產澤山にて解を出せしが此所少し前より風波荒れ來りたれを「ヤマメ」捕の面白さに居る間には段々烈しくなりて解を出せし頃の海岸岩の上に白浪折返して物凄き程なりしが漸く解を出

すを運悪く「カイロップ」の中へ入り樽も籠も用を爲さず進退谷まる間激浪の爲めに磯へ寄せられ傍に大なる岩ありて「ヤマメ」刹那、白浪と共に岩の上で叩き上げられんとするの危境に迫り皆必死にて樽を以て岩に支へ一方に海水を頭から浴びて「カイロップ」を捉へて船を進め漸く脱かれしが、船一度粉砕して身「カイロップ」の中へ陥れば到底浮び上るを得ぬ者と聞き居りし故此危境に際したる時の心も眞底から寒さを覺え愈此に至て吾事休矣かと思ひ水兵等も安き心なく定めし他人より見しならん顔色も蒼白に變せしならんと思はれぬ、漸く之を凌いで本船に歸りハット息をつき先づ「良かりし恐かりしと後時々話の程にもなりぬ、歸り來りて「ヤマメ」を煮て食せしに常柔かにして鮎の如く非常に美味なりし

第十七 方針決定

八月十六日馬場氏も歸船し來り茲に報效義會の方針も略定まりたり泰洋九の如何様にしても曠越島に廻船し能はずとならば是非もなし本島を占守との左まで距離も遠隔に非ず冬期の氣象等本島に於て取調ふるも大差なかるべしと思慮すれば會員の中幾人か本島に在留越年せしめ外渡人の本船歸船の途次新島武魯東灣に寄港せしめ此處にて上陸し越年の上本年の固より時期後れて充分の事業に着手する能はざるの無論ながら武魯東灣開鑿の計畫に着手し灣口岩石の性質深淺位の測計する事を得べしとの見込にて馬場氏にも此事を談じ氏も承諾にて其報酬として會員の及ぶ丈

け解の運送に従事し硫黄其他の荷物卸積に手傳ふべしと約し是にて報效義會と馬場氏の關係も一段落を告げ、員中數名の者、解に手傳ひ居れり此日、大雨にて甚だ鬱陶敷特に此等の協議の爲め上陸の暇もなくして終日船に居りたり

水腫病

翌十七日午前十時頃上陸したり、是より先き馬場氏が硫黄採掘の爲め雇來りたる人夫の中三名程病者あり、報效義會に、豫て一名の醫師を伴ひたれ、之に診察を得たしとて迎に來りし故、醫師島野氏と共に同行せり、此解も硫黄組の荷物を積行さしものにて、小屋掛場の海岸ハ波高くして直接に回漕する能はされ、十町餘を隔てし途中まで送り届け夫より人夫等ハ其荷を荷擔して小屋まで運交なり、夫れ故本船と硫黄採掘の小屋の間外に解小屋なるものありて一方に坑夫等宿泊し一方に解人夫宿泊し居るなり余等も荷物と共に解小屋まで送り届けられぬ、夫より南方に海岸を傳へて進みしが海岸ハ沙浜に非ずして何年となく山腹より巨岩大石崩れ落ちて海を埋めたる火山石の上を砥踏するなれば其歩行の困難なる實に夢想にも及ばざる所、高さ五六尺もある岩に足場を見てハ片足をかけ兩手を以て岩角を掴み漸く跳り上がりてハ又之を降り、岩と岩との距離二三尺もあり其間海潮浸して參々聲あり、他に踏なれば之をも飛越え、兩足にて直立して歩むの難にて手も常に足の代用を爲す殆んど猿猴に異ならず漸く小屋に辿り付きしハ正午頃にて登飯

の要に預り醫師ハ病人を診察せしに脚氣病なるやにて四肢より顔まで腫れ上りて容体輕くハ見えたりし

因に配す千島地方に於て水腫病とて一種の地方病の如きものあり其容態を聞くに身体腫れ心臓麻痺して殆ど、由其様脚氣病に似たり他に人家なき漁戶、其他冬期人跡到らざる嶺山等に越冬して往々此病を以て死する者あり昨年得撫島に三名越冬せしに當春に至り見れば三名とも死し二屍ハ空樽に納めありしも最後の一名ハ爐邊に倒れ居りしのみなれば其原因ハ判然せざれども矢張水腫病ならんと想像するもの多く其病源ハ醫師の説に依れば運動を怠り及び食物の一定するにあるべしとの事にて、夏期非常に身体を運動したる勞力者の冬期に至り急に運動を廢し特に多少の智識ありて平素自ら憚しむる程のものなれば冬期も尙ほ狐や鳥杯の獵に出で、運動を怠らざれども如此き場所に越冬するハ大抵無智の勞力者なれば爲すべき仕事なれば一日の安逸を偷むハ通例にて況んや冬期に至れば寒威酷烈風雪の日多ければ自然室内に潛み爐に登夜火を焚き何の運動もなくして偃臥飽食する許り而して其食物ハ大抵米飯に味噌汁、澤庵、鹽魚と三食とも一定し此如して十二月頃より翌年三四月頃まで所謂糞喰を爲す、水腫病に罹らぬものこそ不思議なれ之を防ぐの術ハ勞働の減ずると共に飽食を慎み多少風雪の日も之を厭はずして銃を握り孤獵にても出づる様なし運動を怠らざりせば之を豫防する取て難に非ず此を是れ注

意せずして獨りに水腫病の恐るべきを説く抑も末なりと云へり

余の固より専門の醫師にも非ざれば深く其理を知らざれども或ひの事實然らんかと思ひ居るなり

第十八 硫黄

醫師の病人を診察し終りたれば夫より同伴して硫黄採掘の現場を見物せんとて「ロンキシリ」山腹
さして登りぬ、去る頃始て「ロンキシリ」山に硫黄の露出しあるを發見し其後人夫等上陸せしより
今日迄僅々の日數なれども已に間口五六間奥行十二三間もある小屋を建て又小屋より採掘の場所
迄二十町餘の距離なるに之をも切開いて道路となしたる由にて其手廻の速なるにハ一驚を喫し
たり、假令小屋の草薺にもせよ充分雨露を凌ぐに足り、又余等沙那出帆の時牝牡五頭の犬を携へ
來りて放ちたれば今此の小屋の周圍に小狗の戯れ居る様や、屋根より炊烟の上るを見れば無人島
たりし「シメヌコマン」も急に人里になりし心地して風景中々に興ありたり夫より段々山路を辿り
しが路の丘陵に沿ひ谷間らしき處を切開きたるにて谷間の兎角風の當りも頸からぬにや榛木も意
外に生長して徑四五寸のもの往々あり之に雜草繁茂して始めの眞に足の踏み所もなき荆棘なりし
ならんに、木を切草を交て幅三尺許りの立派なる道路になり居りぬ勾配も甚だ緩なれば一直線に
上る事を得べし、硫黄採掘場の附近に到りたれば小く平坦の所あり傍に一小池ありて其岸の平地
より一段高く水溢れて落下する事瀝の如く俗も掘抜井の噴水するに異ならず、定めし火山作用に

依りて如此き異變を現はしたるならん、其近傍にハ岩石の墜落したるもの累々としてあり風雨の
爲に撲たれて綠苔青蘚之を彩り地面に「土脂」「フリツア」となん云へる矮草一体に蔓生して毛氈を
布きたらん如く此一區域人工にて作り上げたる一小庭かと思はる、位暫し眺め暮したり特に此の
「フリツア」にハ實生して之を喰ふに少しく酸味ありて且つ甘く味葡萄に似たり土人の之にて酒杯
釀したるやに聞えしが山路獨に苦みたる時杯の効用最も著しく且つ實の生事夥しければ撈取
は忽ちにして「ボクット」に充ちたり之を喰ひ上りしが僅か二十町位の所なれば一時間許りを
費して其場所を達せしに馬場氏一行の事務員も居り人夫も盛んに採掘し居りたり最も大なる噴
火口を望みしに炎烟の迸る勢中々に物凄く其周圍に硫黄露出して黄色を爲し花の如く附着し居
れども其近邊の土盤陥落の恐ありて容易に接近し難き由尙其外にも數個所の噴火口ありて中にハ
燐の烟を噴き居るもあれハ此等危険のなき所より採掘するなり其近邊ハ一体に火山岩にして土盤
に温度あり歩むに心地悪し、特に噴出す烟風の吹廻にて顔を掩ふ事あり、咽辛を覺て呼吸窒息す
がる如し、其傍少く凹みて谷間の如き處に温泉湧き居れり、蟹の目の如くアツ〜と土中より
湧く其量少なければ下流四五尺の所にて土を掘り岩を以て堰留坐すれば腰位を没すべし、是にて
も絶て温浴杯せし事なき余等ハ何程貴き賜ならん、少く寒かりしも早速裸になりて之を浴た
り其心地よき何に譬へん、坑夫等も仕事を終れば入浴して小屋に歸る由何奇の事なりとて喜ひ居

れり。夫より歸路に就きしが未だ小屋に達せざる半腹頃より大雨驟に降り來り更に雨具等の用意なかりし故頭から濡風の如くなりて漸く小屋に着し夫より又彼の險惡なる海岸を辿りて解小屋まで歸り來り最早夕刻なりし故解小屋に一泊するに決し濡れたる衣類を絞り焚火にて乾かし拭して一夜を明したり

第十九 密獵船の跡

八月十八日となりぬ、解小屋より南の方數町を隔て、海岸に大なる岩窟ありて其中に數個の歐文を刻しある由會て水兵の見し者ありて余に告げし故早朝解小屋より見物に行きたり海岸の例の火山岩にして斷崖絶壁數十丈仰て其下を行く、削立錐の如き岩あり蹲踞虎の如き石あり波打際まで二十尺許其岩又平坦にして疊の如し總じて火山作用の岩の集成石なれば自然に人工もて作り爲せたるが如く種々異形怪姿あり、夫より例の岩窟に到りしに絶壁の處を鑿にても掘抜きたるが如く間口四間許奥行五六間高さ三間許り四角に鑿掘しあり下り奇麗なる小砂にて二十餘位敷かみべく、三面皆岩にして襖障子に譬へんか、天井亦岩にして藤百生じ中々見事にして更に陰氣なる事なし、正面行當りたる處の岩に 1886. David 1884 (文字磨滅) 1814. 4. 7H. B. の文字ありて怪げに彫ありたれども苔藓し字消て能く讀めず千八百八十六年等の文字の無論西洋紀元に相違なく其の次に「マビド」と刻したるの米人ならねば英人にして外國獵船杯の船長の名にてあら

んか、彼等幾年かの前千島近海に密獵を爲じ此島に來りて此窟に上陸し、一夜異郷の夢にて結ひつらん時に紀念の爲に刻し去りしものならん、其中に千八百十四年とあるの今より七十九年前にして當時早く已に彼等が此近海に涉獵厥處したるを知る、今日端なく余等此島に來りて日本人の名を見ずして却て「マビド」の名を見る感何ぞ堪へん、見終て解小屋に歸り午後より雲丹を探りに行きたり、此海岸到る處に雲丹多し特に「マビド」の窟の近邊に最も多くして海底淺處岩に附着して栗實を積みたるが如し、竹竿の先に小ざる網を結び引掛て採る、忽ちにして數十個を得之を土産として本船に歸りしが此日大尉も水兵一名及び馬場氏同行者の中一名を伴ひ「ヤヌコタン」を東海岸に横ざり實見し來るべしとて一兩日分の食糧を携へ出掛たる由なりし、是より先き船主代理として本船に乘込み居る藤野と云へる人も東海岸實檢の爲め出發し此時未だ本船に歸り居らざりし

風雨

明て十九日となりしが朝來雷雨條を突く如く上陸の便もなければ終日船内に居りしが寒暖計の正午五十四度にて通例なりし、唯大尉等運惡く此雨に遭ひ一層の難儀を爲し居るならんと想像し居りしのみ

本船備付の端艇を御るし船長及び余外に水兵四名乗り、「ピスケット」も多分に積込み都合良けれ
 ば「シヤスコマン」を一周すべく、さ無くとも海豹を獲し島の二三羽の手中なるべく土産深山な
 れば大鍋洗つて待て居よと大言を吐て勇ましく漕ぎ出でたり、艇を南に向け馬場氏一行小屋掛場
 の海岸に漕ぎ行きし頃其磯邊よりも荷を積みたる舟一艘漕ぎ出で、行會ひ様に聞けるに、大尉
 と共に東海岸を廻りし一行の中昨日來の風雨に惱みて途中にて急病を發し大尉の留て看病を爲し
 一名の水兵の漸く今小屋まで來て急を告げたれば食物衣類を持たして解を遣り一艘の今本船へ醫
 者の迎に行く所にて病人の二里程を隔てし南方海岸に居る由を云ひぬ、如何にせし事かと思ひ心
 配したれと委しき事も分らず、且つ余等の目指す方角なれば其儘分れて漕行しが果して海岸に廻
 見え岩礁に人も居りて解を磯に着んとする様子なるも、波高き事一通りならねば困難を爲し居る、
 模様にて日本形の解でさへ此如くなれば況んや余等の乗りし端艇の到底磯へ着くる事能はねば其
 儘南を指して漕ぎ行き最早や南端の岬角を廻はりて東海岸に出でんとする頃より波非常に高く兎
 角夏期の東海岸の西海岸に比して波の高さの千島群島の通例なれば是非もなしと思ひ尙進まんと
 せしに是に北風さへ吹起りて容易に風る模様も見えねば已むなく一羽の鶴も獲せずして本船に歸
 り來し、午後二時頃なりし、後病人の如何なりしやを聞くに其人の馬場氏一行に同伴し來りし人
 にて去る十八日出發の日晴天にて何事もなかりしに翌十九日に至り料らず大雨にて大尉の毛皮

の外套を着し一人の水兵の兎に角細紗にて毛織なりしも一人の夏服の上は二子の袴を着したるや
 此に雨に撲たれ居る間に綿身悉く濡ひ其上時々腰位を浸して海水を洒りたれば身体冷斯くし
 て終日風雨に濡れ夜に入りたれば何處かに岩陰にても見付け雨を凌がんとせしも更に雨合すべし
 岩もなご且東南岸に流木もなければ火を燃さん使もなく漸く歩みよめて流木のある所に來り火
 を燃さんせしに如何なる事を背囊の中に入れ行きし「マッチ」の昔雨に濡れて更に火つかず其時の
 當惑如何許ぞや種々工夫を爲し流木を削り集めての銃丸より實丸を抜き火薬を擧て火を發したれど
 ゑ是逆も効能なし途方に暮れ雨に撲れて三人とも岩に俯伏し、が一人は何となく呼吸苦しき様聞
 める故其人の名を呼ぶに更に返辭なし耳を付けて聞けば氣息喘々僅かに息あり時々苦しきと幽
 かに喚くのみ、大尉始め大に撥き毛皮の外套を脱ぎ雨を絞て之に着せ、畢丸を冷す、最も危し
 き聞きた故大尉の病人の股間に頭を入れて暖を保ち一刻千秋にて夜の明るを待ち夜明たれば漸く
 火を小屋に走らしめ夫より火を燃やし病人を暖めしに漸く目を開き入心地も付さし由凡を十時
 許り人事不省にてありしと全然寒さの爲に凍死せんとしたるなりけり大尉等も寒さの爲に
 凍て物云ふ能はぬ程なりしと云へり

第二十 再度の海馬嶺

八月廿一日、昨日の大言吐て海豹獵に出向し甲斐もなく風波荒れて途中より引返したれば陸物笑

となりしが、大鍋洗て待て居よ御馳走せんと云ひし頭ハムサノ、潰されるせず、何れ一度の目に
餘る程の癩を爲して殺かち呉れんとて、再びエカルマ島に海馬の群栖を襲撃するに決し、勇氣日
頃十倍して腕を擦りて日和の定まるを待ちしが、何にせよ本船よりエカルマ島まで七哩位の
距離にて特に彼々激潮あれ、迂濶に漕出されず、況んや先方にて獵を爲し又本船に歸るに如
何にして終日の仕事なれば、餘程飽かなる日和を見ねばならず、此日の朝來風荒く波高くして
無論端艇を漕ぐ日和に非されば見合せたり、鮮なれば何程か波の高さを凌げざる又進航端艇の如
く速かならざれば却て害有て利なし

翌廿二日に至り今日こそと思ひて未明の頃より甲板に出で日和を見しに何分面白からざる模様
にて又もや見合せぬ、終日無聊天公に訴ふるの外なし

翌二十三日に至り早朝起り出で見れば、天珍らしく晴波り風なく波静かにしてエカルマ島端艇と
して雲に穿へ翠色満ちんと欲して余等を招くに似たり、即ち端艇を仰し人先に朝襲を喫し船に積
みしれ各自の銃及び「キリ」ナイフの用ふる小刀「三三」獲獲食の爲めに「ビスケット」多分其れに
飲料水、外に過る日海馬獵の時、海に落ちたる海馬を引上るに困りたれば其に懲て今度ハ溜防夫
の用ふる鷹口と云ふもの本船にあつし借受け三艇程用意し午前六時五十分頃森音、小野
三郎、上田義之助、白瀬及ひ余の五人乗組みたり、大尉ハ此時本船に歸り居らざりし爲め同

船せざりし、斯くて一直線にエカルマ島を目標と漕出なたり、三三哩も漕行をすれば本船ハ渺茫
波原に没して見えす追々エカルマ島に近づくに従つて閉關の遊べるもの、鳥鴨の群れる者歎乃の聲
に驚かされて一時に空中に舞上り、飛の周圍を飛ぶ事恰も時求むる群鴉に異ならず、其中最も多きハ
「正語」ハ「ヒロカ」と稱する鴨にて背の赤き鳥なり「土語」ハ「ヒロカ」の義「ヒロカ」とハ奇麗と云ふ
意味なるやにて此鳥の多き事何に譬へんか、實に形容するの言葉なし、余等の艇を何と思ひ居る
にや、殊更に余等の頭上を翱翔する故散彈にて獵撃せしに艇動さ鳥飛べハ容易に中ず僅に二羽程
捕へしが夫より段々島の附近に到りしに如何にも物凄程の激潮に會したり、潮流來つてエカル
マ島に衝突し反勢激して海に掃出す處、風なくして海面白波を立、恰も大河の奔流石に激して流
るゝが如し、其中に艇を巻込れて流さるゝハ必然なれば腕を限り之を避け漸く安全の所に至
り過る日海馬を獵せし岩角に達せしハ十時三十分にて三時間餘を費したり、海馬棲息の岩に達す
る少し以前より所謂枚を衝み旗を伏せ、獲獲音をも靜に爲し息を殺して彼等の眼を掻かざる様進
みしが果して巨大なる牛の如き奴、彼方此方の岩の上に居りぬ、今度ハ如何の事か見ハ一足も見
えず、夫より進みしが忽ちにして一疋の海馬に見付りぬ、彼ハ大なる首を擡げ「ラー」と一聲叫ん
で蹶を以て可笑げに這ひ洶然飛込んだり、之を聞付け其處近傍に七八疋も居りし海馬皆目を覺
したるが我先に這廻て皆飛込んだり夫より岩の傍まで行きしに以前に飛込し海馬の時々呼吸の爲に

海面に浮び上るのみにて岩の上の一疋も居らず、見れば其中に見も交り居りて痛く成長し最早親と共に海中に泳遊る程の者となりぬ、浮き上りたる拍子に撃んとて銃を構へ居れば時として艇を去る一間位の處に浮び艇を見るや驚き周章て猛然水煙を立て潜込事もあれど何分狙定まらずして容易に撃たれぬ、或の姿を隠し潜み居らば再び岩に上ぬにも限らじとて艇を一方の岩陰に廻し二名許り上陸し隠れ居りしに暫時にして果して一疋の巨大なる親二十間許りも隔てたる岩に上りたり水兵之を見るや狙を定めて一發放らしに留りたりと見え艦様に倒れたり、當ったと喚び叫んで銃砲を置き脇口手にして駆け出だせしに海馬の未だ死に切らずして人の来るを見るや首を擡げて齒を刺さ嘴付ん許りの勢なれば水兵の脇口振上げ頭を狙て一撃せしが刺らばこそボカント音して刃返りたり今一撃するや今度ハ鷹申の先を見ん事咬へられ頭を二振振や脇口取られ其儘飛んで海の中へ落ちたり水兵の呆氣に取れ暫時茫然たりしが思ひ直して銃砲取り來れ留を撃んと喚ぶ故此方より一名の水兵銃砲を持ち駆け付居る間に大なる浪來て岩に打上げ海馬の波と共にズルと滑りて海中に落ち其儘はみで見えずなりぬ余等失望したれど詮方なし其中に正午にもなりたれば元の岩陰にて「ビスケット」を啖み食を爲し居りしに今度ハ以前より間近の岩に陰る聲聞えし故水兵の窺かに覗しに果して以前の者に優るとも劣らぬ程巨大なる親海馬上り來りたり、今度ハ赤分上りたる處を撃方良らめとて待たれば赤分上りたり、と云様放らしが一發にて留

らず二顆目にて全く息絶え岩の少しく凹たる處に俯伏に倒れたり、余等思はず拍手し其傍らに行きしに銃口より血の迸る事瀧の如し兎に角皮を刺ぐべしとて俯伏にて不便なれば仰向にせん爲め五人手をかけ一方の蹠や尾を捉へて引起さんとせしに中々以て動かばこそ宛から礮石の如くにて如何とも詮方なし此儘にて艇に積まば艇の覆るハ無論の事已むなく背を割切僅に幾部分の肉を取りたるのみ、皮も何も其儘にして最早夕刻に間もなければ若し都合良ければ此後に解にて取り來るべしとて岩の上にて遣し歸り來りたり、其巨大なる事眞に膽を冷したり重量の蓋し七八十貫目もあらん大八車を曳く牛に聊か劣らざるべし本船に歸りしハ最早點燈頃なりし

第廿一 越年

足掻の駒の早くしてハ八月廿四日となりぬ、船ハ一兩日にして出帆歸航の途に就くに決しぬ大尉ハ一兩日前より氣象の觀測を爲さんとて上陸の儘歸らず、余等ハ昨日殺し海馬の肉を料理し程良分配して大尉の許及び小艇小屋、馬場氏一行の小屋にも送り其餘の残肉ハ本船一同にて煮て食ふもあり炙るもありて終日喰ひたれども尙餘ありたり越て廿五日に至りたれば大尉も歸り來りて愈々明廿六日ハ本船出帆に決したるやにて報效義會員中九名ハ「シヤスコマン」に残り越年するに決し其餘ハ新知島に向ふに決し持て來し糧食防寒衣等も夫々適宜に分配せざるを得ず、急に荷物

五十三
日以來、更に瓦斯なく大抵清朝の天氣にて近來誠に珍らしき事なりし時に此日の如き平日と異なりて暖氣を覺え正午寒暖計も六十四度に上り是を眞に千島の土用ならん一笑せり

告別

愈々廿六日となりぬれ、早朝より「シヤンコン」へ留る者の荷物を陸上に掛り一方、又馬場氏一行の同島を引拂ひて歸船するおれ、行く者歸る者解の往來絶間なく午後五時頃、荷積荷御共終て最後の解にて會員中の越年者、漕出でたり、一度袂を分ちて、絶海孤島に旅の空、互に安否を白波に楫の音絶て便なく、死生艱樂天に任せて首尾能又の逢ふ瀬を待つ許り、帽子打振々々別れし時の心の中哀れと云ふも愚なり、見上る解に見下す本船、姿の見えぬまで互に見送つ、見送れつ御壯健で御達者でとの聲、波に響て漸く遠くなりぬ、斯くて夕刻六時頃本船、愈々錨を抜て沖に出でたり、夜に入り沖に漂ひ居りしが會て脚氣病に罹り居りたる馬場氏一行の、人夫急に病危篤に迫り種々看護したるも遂に効なく死亡したり依て之を葬埋せん爲め一度沖に出でたる本船、又引返して針を「シヤンコン」に向けたり此日も珍らしき晴天にて正午寒暖計六十八度に上りたり
翌廿七日拂曉「シヤンコン」硫黄採掘場の麓に着し、終日何事もなく、患者死亡してより廿四時間を経過したれば夕刻解にて死骸を送り埋葬を終り直に拔錨沖合に走りたり此日も珍らしき晴天正午寒暖計六十二度を示したり

翌二十八日前日來の晴天に引換へ朝來霧深く閉ち、見る者、敵を叩く白浪と櫓打つ音のみ天涯咫尺を辨せず寒暖計も正午五十六度に低落し特に風、逆風なれば船更に進まず、心も共に沖に漂ふ許り

翌廿九日に至れば瓦斯始めて晴れ船に當て知林古丹を見たり、風、相變らず逆風なれば船、西に向け走つ、亦東にマギリ、其走る様羊腸の如し夕刻より風少し出で敵に觸る、波の音も高く船少し走りが頗て夜に入れば蒼海濛々

邂逅

明て八月卅日といなりぬ、拂曉余等未だ臥床に在り、大尉の聲として軍艦見えた起よくと其聲耳を聳くが如く夢忽ち驚きぬ、匆倉起き出で甲板に上れり、遙かに見渡せば煙波渺茫の中残煙長く曳いて朝霞を染む、風景云々へからず特に余等紗那出帆以來已に三旬、蒼海波展々荒れて更に船を見ず、孤帆落落々萬里に漂ひ今日始めて船を見る歡何を極らん、双眼鏡を執りて熟視するに船体白し、軍艦鑿城船体亦白し、然れども鑿城の既に已に占守近海の測量を爲し居る時期と思はれ今歸航の途かと思れ、正しく針路北に向て占守方面に行く者の如し、魯の軍艦か英の軍艦か將た鑿城か疑團容易に釋けざりし

第廿二 鑿城艦に乗る

何れの軍艦とも分らざりしが海に於て船の相遭ふや必ず自國の國旗を掲げて其國籍を示すの例なり、我本船に於ても直に船長令して日章旗を檣頭に掲げしむ、見れば果して彼の軍艦も翩翩として一旗を掲ぐ、双眼鏡を執て仔細に見るに疑もなく我帝國軍艦の旗章なりけり、余等雀躍して喜びぬ、斯くする中彼の軍艦針を我船に向け黒煙を吞吐し接近し來る、正しく軍艦整城なれば大尉の直に仕度を調へ解を卸して整城に行きたり、此一刹那に余等直に新知行の方向を轉じ整城に乗換へ占守へ向はんと胸算既に定まりぬ、唯整城艦長便乗を許すや否や、大尉の歸船を一剎秋にて待ちたり、大尉歸り來て云ふ艦長容易に便乗を許したれば今より直に乗換へしと而して海面を見れば波靜にして風なく一望蒼々湖の如し、假令整城艦容易に便乗を許すも此日若し風荒れ波高ければ如何にして能く解を往來せしむるを得ん、天未だ報效義會を棄てず前途豈か望ならずやと、心算かに祝せぬ者となかりけり、何にせよ寢耳に水急に行事を收め荷を積り混雑云ふへは様なかりしも、豫て冀望の地に達するなれば心も何んとなく勇まれて正午頃には荷も悉皆積終り馬場氏一行及び泰洋丸船員にも別を告げ大尉始め余等九名整城に乗換へ整城の直に汽罐の運轉を始め此夜ひた走りに北を指して走りしが

翌卅一日に至り目覺めて甲板に出で見れば觀蓮島、高山峻嶽、山嶺雪を頂いて目前にあり、此日も亦晴朗靜波昨日の如くなれば右に「オチコマン」「マカンルシ」「シリシキ」等の諸群島燈臺を抹



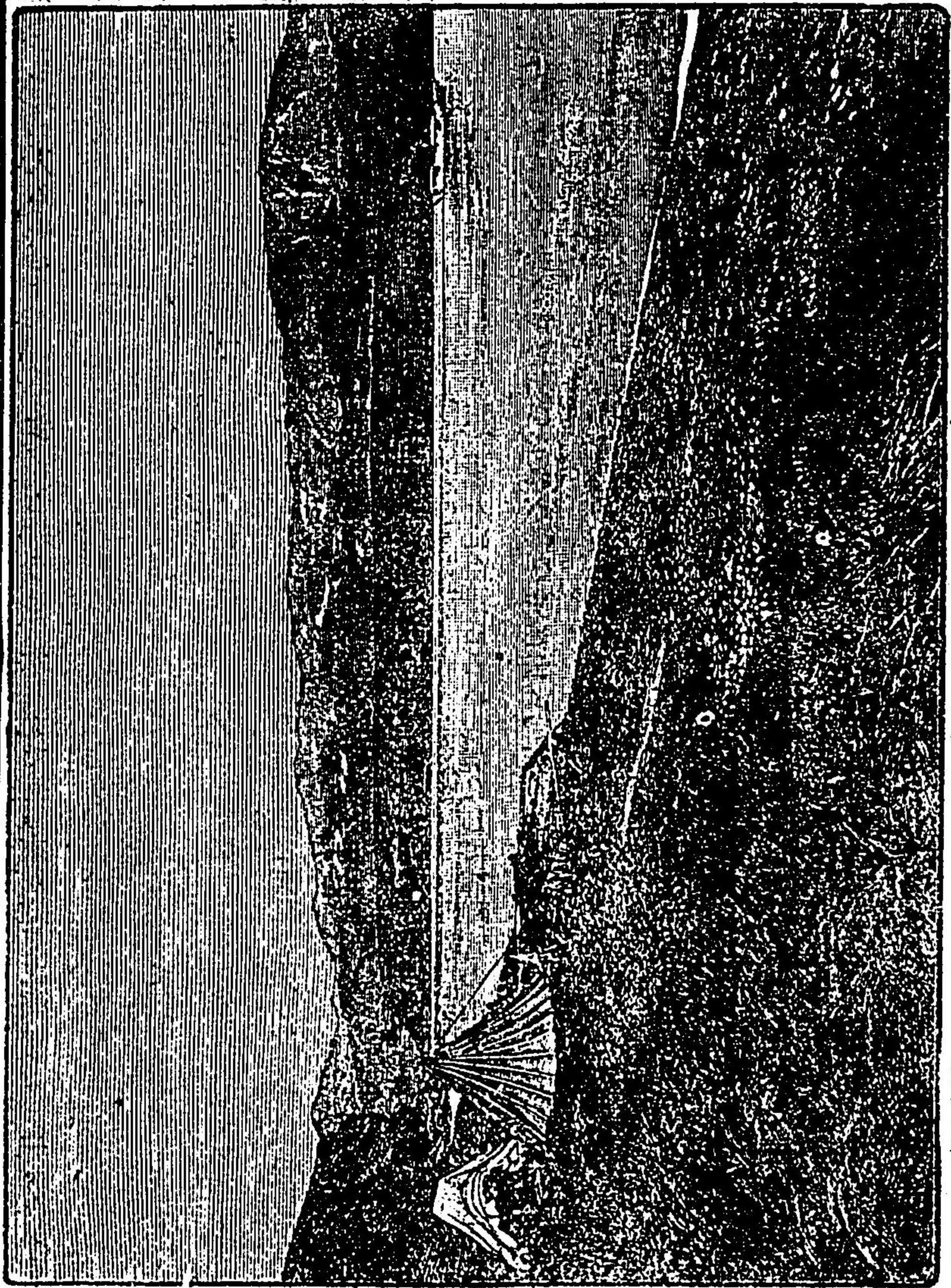
たるが如く之を指點して走り阿頼斗島を左舷に見觀蓮島を左舷に見て直進せしが遙か向ふに陸岸遠く海に突出したるが如く見ゆるに占守なりと聞きし時の心の嬉しき何に對へん、占守を觀蓮の間に觀蓮海峽あれを陸に蔽はれて見えず、占守の高山なき故一望平野の如し、余等唯々汽罐の一轉毎に故郷にでも近く心地、愈々觀蓮海峽も見えず占守の沿岸丘陵起伏の様杯指點し得し午前

十時頃にて磐城艦の先に占守北岸別飛に行き更に引返して進航したる、即ち此圖嶮越海峽にして
 圖中右の占守島左の嶮越島とす、今井崎を左舷に見、磐城崎を右舷に見て徐々進航し、烏帽子岩
 嶮の岩を指點して占守島片岡灣を通り過ぎ、菱形の山を右舷に見て嶮越島柏原灣に向ひ兎山に接
 近して錨を投せし、最早正午に近く、此時水産會社の千島丸恰も柏原灣に碇泊し居りたり是より
 先き、余等紗那出帆の時一艘の解を泰洋丸に搭載して持來らんとせしに本船に積み場なくして
 拒絕せられ、船なけれ、假令占守に行くも何の働も爲すべしなけれ、一方ならず苦慮せしに幸に
 軍艦武藏の數日ならずして占守に發航する由を聞きし故之に送致を託し占守に届けん事紗那にて
 云殘し來りしに磐城の便にて聞け、果して武藏艦の來り其解の柏原灣に陸上し遺し置きたりとの
 事なりしが已に三句餘も経過せし今日なれば或ひの激浪の爲に擧れぬか或ひの密繼船杯に持めら
 れぬかと多少心配し來りたれば不取敢雙眼鏡を以て海岸を吟味せしに正しく解の如きもの海岸小
 高處に伏せありたり之にも満足して愁眉を開き海機高運云ふ許なし

第廿三 上陸

直に解の取御に掛り余等大尉始め水兵と共に磐城艦の端艇にて送られ嶮越に上陸し解のある處に
 行て見れば一報效義會所有傳馬軍艦武藏送之明治廿六年月日」との木標ありて板子類までも残らず
 崩ひありたれば直に引御して波打際に乗入れしに三十餘日間日光に晒され居りたれば繼目餘隙

生じし垢の入る事甚だし端艇にて曳き辛うじて本艦まで持ち來り艦尾に繋いで急に「イキ」を
 打て垢を止め、本艦の直に錨を抜いて占守島片岡灣に廻り余等一同此處にて上陸する豫定にて解
 を曳船として來り其距離三哩位に過ぎれば間もなく片岡灣に來りて錨を投じたるは正午頃
 て夫より直に軍艦の端艇にて援られて荷上に從事し夕刻までには荷も悉皆陸上して不取敢天幕を
 張り當分其内に生活する都合にて片岡灣頭、子林川の南海岸に天幕を張りたり左圍の即ち其眞景
 にして磐城艦士官の撮影に掛るものなるが一章海水を隔て、向ふに見ゆるは嶮越島にして此圍の
 嶮越海峽なり、其距離幅廣さ處三哩狭さ處一哩、嶮越島内一体に高原の如く見ゆるは菱形の山に
 して其上の高山峻嶒相重り山腹處々に白點あるは雪塊にして四時雪の消する事なく、千歲不滅
 の雪其堅さ事岩の如く斧を用ひざれば砕けずと云ふ、天幕の右傍に横はりたるは解を伏せたるに
 て左傍に白く見ゆるは米喰衣類を積み重ね雨露を防がんと爲し「ツツ」を掩ひたるなり、磐城艦の
 片岡灣頭近く投錨したれば撮影の際光線的作用にて斯く嶮越島に接近したるが如くに見ゆ、海岸
 波打際の細沙にして數歩隔て、雜草生茂深き腰を没す、海岸洗木至て稀なれども尙天幕の右傍少
 し離れて白きもの見ゆるは流水の巨大なるもの打上りて半ば砂に埋もれたるなり、天幕の左傍小
 高き處に舊土人の墓あり、此圖の右端盡きたる處に即ち子林川の海に注ぐ處なり、此日（撮影の
 日）上陸の翌日なり、風なき海靜にして海岸少しの波なし海岸より此雜草を分け入り一町位進み

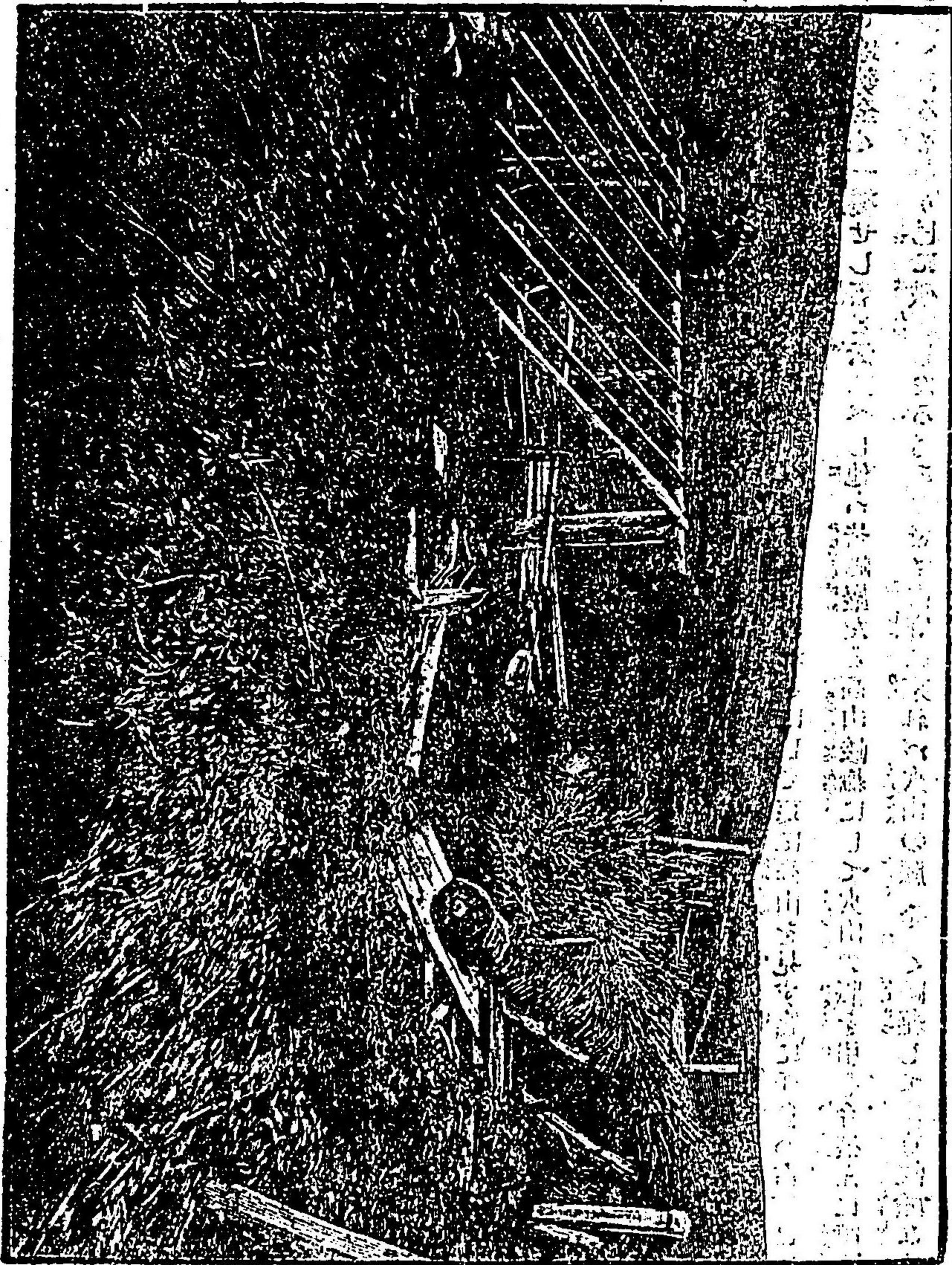


し奥に土人の養屋敷あり、余等も地を相して直に小屋掛に従事せん積り、此日の已に夕刻に迫りたれば何事をも爲す能はず、不取敢石を列べ怪しげなる籠を築いて夕飯の仕度掛り子林川より飲料水を汲取りしに極めて清良のものなり皆て磐城艦にて分析せしに内地の水に往々有り易き「アンモニア」杯の有機物の少しも含ま居らぬ由、夫故に山間最も清潔なる谿流を好みて極む例の「ヤマメ」或ひら處に依り「ヤマメ」ども云此川に最も多し川幅廣く處一丈狭き處三尺許り水淺くして漸く底を没す鮮魚の往來數へ得べし、此川に鱒亦湧りて夕刻水兵等二尾程捕へ來りて早速夕飯の菜に爲したり、夜に入りたれば細雨霏々として來り夜半頃より徳を突くが如くになりたれば天幕の濡ふに従て雨滴り墜らるるせず、特に紗那出帆以來絶て擇捉島に残りし會員の有様や内地の音信等聞く事なかりしに磐城の便に依りて書信も來り其況をも聞くを得久々にて新聞も手にしたり、又先に武藏艦の千島に廻航したる時約束の占守島に大尉の一行居らざるのみか同艦往復も泰洋丸を見ず、又擇捉島の東海岸に硫黄を入る、狐の流れ寄りたる事ありて、泰洋丸の硫黄採掘の爲に出向たる船なれば定めし途中にて難破し之より其狐の流寄りたるものなるべしとの風評一時盛んにして擇捉の會員の皆一行の身上を氣遣ひ安否を尋ねさせん爲め特に會員の一人を擇捉より磐城に乗艦し遣したれば擇捉の實況を之より聞く事を得、義會が乏しき資本を掻き集めて従事したる鱒漁の當年不幸にも大不漁にて一方ならぬ損害を蒙り當年の越年米の如何にし

て之を得んと種々苦惱中なりと聞き又々眉を翠め彼是終夜語り明したり

第廿四 小屋掛

八月も最早暮れて九月一日となりぬ早曉起き出で物珍らしさに近き邊を逍遙し野邊を見渡すに
余等「シヤ、スモヤン」に着せし時どり打て種で草の梢も何日となしに茶色に變じて霜枯の秋の様を
現し金風蕭々として肌に通り何日白妙の雪景色と變るやも料られね、小屋掛の準備の一日も怠る
べきに非ずとて此日の如き宿雨未だ霽れずして權傾じさ云々評なかりしも直に小屋掛の仕度掛
り其場所の天幕を張りたる海岸より半町許り山に入りたる所にて子林川の畔なり左圍の即ち其眞
景にして右に巖高く塚の如く見ゆる、土人の舊屋にて土を掘下草にて屋根を葺き其上に土を掩
ひたれ、之に雑草生茂其傍に入口あり、中に入て直立すれば頭天井に支へぬ、左に一行の小
屋にて兩端の柱の以前より掘建あり多分番主人の建てしものなるべく昨年夏片岡侍従の暫時備居
せしものなる、棟の洗木にて此近傍にて拾ひたり、梁木の妙那より持行きしもの斯く打付たる
上に細き流木を横へ草にて屋根を葺き土を三尺許り掘下り間口二間奥行三間、主人の舊穴屋に
比して頗る巨大なり、棟の左端より別庇を出して窓を明け竈を築き内便所も拵へたり入口二重
にして本屋の中央に竈を切たり、遙か北見ゆる、占守の山にして高さ三百尺位に過ぎず小屋の
左傍に子林川流れ近傍一体雑草甚だしく繁茂せり、今現に働さつゝある、何れも會員にして余の



大尉と共に食糧の蒐集に従事したり、此日も雨を冒して子林川に鱒を捕に行きたり水淺ければ網を用るに及ばず楢を以て突又楢を以て擲殺す、水少く深き所に鱒泳ぎ居る故之を追へば脊を半現はし激刺水と飛して深淵に上る後より之を追掛棒もて擲るに頭から水沫を浴るも面白ければ意をもせず暫時にして廿餘尾を捕へ追々川上に昇て四五町も行しに川の邊崖に望んで半疊位に奇麗に草伏て毛氈を敷きたるが如く其傍に草折て何者か歩たらん如き跡あり、問はでも知るべきは熊の遺跡にして毛氈を敷きたるが如き熊の坐せし跡なり其上に熊の頭や骨環散亂しありて思ふに熊の屍の上にて魚のトに來るを待不意に捕ふる者ならん、鱒を捕へ來りたれども已に期節後れたる爲め老魚(方言オチノ鱒と云ふ)になりて産物(鱒も産卵の際ハ尾鱗も石に摺切又産卵し終れば自然に死するものなり)ならぬなく又川中處々に死魚の流れ居るものありき、餘にも何程か味劣とも決して捨る程のものにも非ず一半ハ腐潰となし一半ハ糞糞して充分に食したり、又此川上に湖るに従て例の「ヤマハ」の居る事夥しく群を爲して游泳し、兩岸追々救まりて遂に純然たる一筋流に變じ奔流石に激し直瀉灘の如き所もありき仰ぎ見れば兩岸とも丘陵にして左まで高からず之に昇りて見れば滿目高原の如くにして更に高山を見ず實に千島ハ占守に至りて地勢全く一變せし者と云ふべし他の皆峻巖たる高山峻嶽にして火山の脈を引き今盛んに噴火しつゝあるもあり已に破裂したるもあれども占守に來れば火山の脈全く斷絶して山亦峻嶽なら

姿容柔和にして饑饉にても伏せたるが如し而して地味ハ草根木葉の腐敗して成りたる沈澱層にして此價元來多少の培養分を含蓄し居れば膏脂の地と云ふを得べし

第廿五 魚釣及び蝸

九月二日此日ハ一天晴明なれば朝より衣服の破れ杯を補ひ亦垢付たる肌着類山の如くなりしが久々に洗濯をも爲し午後より例の「ヤマハ」を釣り試みたり、釣針ハ豫て紗那にて買附へ行きたれども固より馬の尾杯の用意なければ太き麻絲を結び附鱒の胎子を餌として釣しに水淺くして滑ければ魚の餌を食所能く見え、餌を下すや否や電の如く飛び來て喰付、鱒に喰付たる所を見届けたる上引上るなれば決して外る、杯の事なく如何なる下手にても釣れぬと云ふ事なし、大尉及び余外に醫師島野氏と三名にて三時間許に石油の空罎に入分目許り釣たり其數三四百もあらん、一糜の食料とも爲すに足れり追々夕刻に至りしに蝸の出づる事甚だし、昨日ハ雨天なりし爲めか更に見えざりしも此日ハ餘程暖氣にて正午ハ七十一度にも上りたれば其等の故か河岸杯ハ最も烈しく余等魚を釣居るに、顔の邊へ群を爲して飛來り目に入り耳に入り挿へども直に集り來りて、特に内地の蝸よりも形小なれば衣服の縫目を潜り體を刺、襟頸より手足の如き現はれ居る部分ハ何億萬とも知れぬ蝸群に襲はれて赤く腫れ上り、魚釣の面白さに堪へず追拂ひて居りしも遂に堪へ切らずして天幕に逃歸りたり、海岸に鹽風の吹拂ふ爲か蝸至て少し、小屋掛に蝸も居る水兵等

も朝に攻らるゝ何よりも辛しとて翻し居れり、此日磐城艦の片岡灣を抜船して北岸別飛に廻りたり、颯楚海峽の測量ハ已に昨年にて終りたれば本年ハ別飛灣を測量の豫定なるやにて斯く廻航したるなりけり

翌三日に至り朝目覚むれば余ハ頭重く眩暈して食も甘からず正しく風邪に犯されたる氣味なれば早速診斷を得て終日天幕内に就伏し居りたるも去りて固より思ふ様發汗等も爲す能はざれば唯衣服を着重て勞居りたり、此日夕刻片岡灣内に二三疋の海豹遊寄たるを見付解を出して一疋を銃殺捕獲したり

翌四日も尙心地癒されば終日天幕を出でず大尉のみ相變らず奮發にて食物の取集に掛り此日も鶴を數羽捕獲し來りたり

小蟲

翌五日朝來強雨篠を突く如くなれば小屋掛の方も食糧の集方も何れも仕事を休みたり寒暖計の正午五十六度を示したり

翌六日に至るも雨未だ霽れされども昨日仕事を休みたれば此日の昔雨を冒して仕事に取掛たり夜に入り暴風雨になりて之と同時に海岸に打上りたる海藻類の腐敗したる中に桶息する名も知れぬ一種の小蟲(形蚤に似て大なり)群を爲して天幕に這上り天幕内にて火を焚き煙を出す爲に明たる

小穴より落來て余等睡れる頭の上を飛び廻り耳に入りたりと云ふもあり口の中へ飛込みたりと云ふもありて蟲の爲に終夜騒ぎ明したり、其後實驗するに海荒れ浪高くなれば必ず此蟲陸地へ這ひ上りて其れと同時に天幕にも上り來るが如くなりし

落成

翌七日に至りて余も始めて心地も良く風邪も癒えたる様覺ゆる故天幕より出で、小屋掛の場所探に行て見しに最早屋根も葺終り今日一日にて悉皆落成の見込にて明日ハ天幕より移轉し移居をも爲すべしとて越れ居りたり、中に又氣の利たる一人ハ小屋の傍に土を掘返して儘か許りの畑を作り大根菜類の種をも播たる由なりし此日の朝來晴朗にて正午六十一度に上りたり

第廿六 移轉

九月八日、小屋ハ豫記の如く昨日已に出來上りたれば此日早朝より天幕を蝨み荷を運んで小屋に移轉しぬ各自に流木を置列へ枯草を敷いての寢處をしつらひ其又傍にハ米廿餘俵を積み重ね油、味噌、漬物等も一ヶ年の貯へなれば中々に多く處狭きまで置列べたり尙此他にも鹽俵數十個ありて置處なれば傍にある土人の舊穴居(小屋掛圖参照)を取片付之を鹽藏に充ぬ、斯くして一通り片付たれども考へ見れば屋根の草葺にて晝夜の差別なく焚火を爲し居る事故過て火災の憂なしとも云ふべからず若し一身ハ幸にして免るゝも貯へある米糧類を焼き盡しなば如何にして露の

命を支へ得べき米糧類を窺所と共にするの危き事の限りなれば別に今一棟の小屋を建て之を倉庫に充て米糧火藥の如き必要品を保存すべしとの議ありて之に決し今の小屋より少し離れて地均に取掛りたり此日雲の晴向より阿頼斗島を眺めしに全山皆白くして雪を頂き居りたり蓋し數日前の強雨の占守にてこそ雨なりけれ阿頼斗島にては化して六花と爲り白雪隨々銀の世界を描き出したるなり、阿頼斗島と云ひながら全島一の高山にして雪を摩する事三千尺餘形ち富士山に似たり一一名千島富士とも云ひ幌達島の北西角を距る北西大約十一哩の處にあり此日正午寒暄計五十八度

九月九日、此日朝來雨降る、如何にしてけん折角辛苦して作り上たる小屋に雨漏る事甚だし點滴落來て衣袂皆濡ひ居るに慮なし、噫、無人の境土嚴寒に敵し風雪と戰はん爲に築きたる數人の生命を體として僅かに城郭と頼む孤屋の完からざる如此如何のせんぞ苦慮したれども期節後れたれば再築の餘日もなく何事も經驗に乏しきの致す所畢竟深く考ふれば草も不足にて且つ勾配の緩なるに依りしなりけれ、内地に在て何人か能く如此き小屋を築らしものあるか、蒙昧無智の野民の眞似ごと却て六ヶ敷ものなりと一笑せしが斯くて止むべきに非ざれば此上に土を掩はんか草を加へんかと大尉も種々工夫を凝せしが一策を案じ此上にツツクを被ふ事に決し端艇の帆の殘物採ありたれば之を纏足てハ屋根程の大きになじ一体に之を掩ひたり

九月十日に至りて大尉と共に別飛の旅を思ひ立ぬ、是より先別飛にハ是非一度探檢の爲旅行せんと約し置きたれども未だ小屋も出来上らざれば其機を得ずして止居りしが元來別飛とハ占守島内にて土人の本村落のある所にして片岡灣(舊名モヨロツプ)と云ふ「ツボイチ」とも云ふ「小村落に過ぎず隨て土人の住居せし者も至て少なければ唯片岡灣の船舶の寄泊に宜しく運輸の便ありし故露商「ゴリロス」の手代採も此處に商館を構へ亦希臘教の寺院(明治廿四年まで現存し在りて常に外國艦船々員の上陸宿泊所となり居りしを以て水産會社千島丸の船員等憤慨に思ひ放火して燒盡したり)も此處に在りき、是より別飛までハ山路二里半若くハ三里と唱へ占守西北岸に位す何故土人の村落此處にありしやと云ふに土語「別」とハ「川」飛」とハ「湖」の義にして本來「ベツ」と呼ぶに至當なるに訛りて別飛と呼ぶ次第なるが斯く湖水ありて其水溢れて海に注ぎ此の湖に紅鱒の浜る事多く自然に魚漁ある故土人の斯く本居を占めたる者にて將來此島に移住せんとする者にハ一日も早く探檢し置くべき有要の地なれば大尉と共に斯くの旅行を思ひ立ちぬ、而して「モヨロツプ」(今の片岡灣)と「ベツ」の間ハ山路に舊土人の歩みし一小徑を存しある由を聞きし草深くして見當らざれば果して通行し得るや否やハ知れねと海岸を迂廻するに決したり加之日歸ハ到底六ヶ敷ければ「ピステット」(總詰類も二日分携へ銃を攜ひ雨具も用意したり)

旅装全く整ひたれば午前八時大尉と共に小屋を獲足し西北指して海岸を辿りたり時恰も干潮に際
 したれば波打際に何時も見ぬ汐被の岩も現れて思の外に歩行易く時々海水の脛を浸したる事もあ
 りしが無難に一里半許も過て鵜の岩に至れば名詮自ら稱ひて岩壁削立數十丈怪歌空を摩するの
 所往々凹凸缺落ありて無数の鵜此間に巢を構へ今正に雛を育する時なれば群雛嗚々を鳴ら糞堆垂



れて岩面爲に白し余等大尉と共に之を狙撃す一發にして必ず二三羽を得七八羽を捕へたれども重
 くして持ち行くべからず僅かに一羽を手にして進みしが是より道漸く険にして龍盤虎踞大石を攀
 登して歩む數歩ならざるに今の砲聲に驚きたる者か傍の岩陰より一疋の狐跳り出で口に鵜の死
 たるを咬へ居りたり大尉先に見付けてソレを云ひ標銃を構へしに一目散に逃げ出して忽ち姿を
 隠くしたり少しく進みしに又もや二疋の狐を見たり狐の多き事推して知るべし、右圖中今井崎を
 迂廻する所の窮崖海に突出し白浪之を洗ふ、容易に渡る可らず、已むなく衣服を脱し腰を没して
 進む満潮の時決して到るべからざる所なり夫より別飛川海に注ぐまで平沙にして歩行甚だ易
 し、見れば磐城艦の別飛灣内に投錨し居りたり、川口に達せしは最早正午頃なりし故磯邊に憩ふ
 てビスケットを喫み登飯を爲し、夫より川に遡りたり川幅十間餘深二三尺もあらん、流緩にし
 て川底泥なり蓋し湖水の溢れて海に入るものなるに依る、河畔に雜草夥しく繁茂して鴨群の足
 下より飛立事あり、其鴨の内地の眞鴨といふに異ならずして千島にて始めて之を見たり、川を遡
 る事十餘間にして湖水に達し遙か向ふを見渡せば草原の中少しく小高き處に土人の舊村落ありて
 流木を建連ね點々散在す、即ち之に向ひ湖畔を傳ふて進しが沼澤水溜りて踏を遮り草の爲に見
 えず思はず踏込て脚を没する事あり、漸く土人穴居の跡に辿り着ぬ、頽敗已に崩れ落ちたるもあ
 り、儼として其形を存し居るもあり、構造は「シヤスコマン」と少しも異ならずれども唯一棟酋長

の居かとも思はるゝに行て見しに頗る巨大にして土中を掘擽げて部屋の間敷を多くし部屋と部屋との間の削立たる土にて仕切り入口に扉ありて之を排して奥に入る各室に必ず窓あり煙あり又寝臺のありしもありて蓋し食室寝室等に別ちたるものならん建築も堅固なる爲めか少しも顛敗せざれども野狐の栖處を隠しく其處此處に乾きたる糞堆く又狐の年経し死骸杯もありて毛と骨と散亂し居るもありたり、最早夕刻にも間近ければ今宵一夜の宿をば此空穴を借るに決し此處に背囊などを御して身輕に爲し銃を携さへたるのみにて再び穴居を出で湖水の模樑魚族の種類等を探檢せばやとて出でたり、先づ少しく小高き處に昇りて湖面の見取を爲すに洲密蘆葦の如き雜草淵蔓して形狀明かならず一望茫として又忽ち深く淵然瓢を列べたるが如き處あり廣き處一里位狹き處二三町に過ぎず湖面鏡の如く兩岸の丘陵高低環擁して鏡中に倒影し孤雁の時に水を掠めて下らんとするあり水雲縹緲の趣を極む、此雁も内地の者と同じくして蓋し秋冷を待て再び前歸するならん、夫より湖畔に下り消遙せしに往々熊の足跡泥に印しあり又草を敷て坐したる痕もありし、行くゝ進みしに常に紅鱗の多く群るを見たり、産卵期に際したれば雌雄相追ひ激々音を現はして跳る、手にて捕へんと到れば沖に迷る、一策を案じ散弾にて脊を狙て撃ちたれば忽ち倒れたり、鐵砲にて魚を捕ふ時に取りての妙案哉と一笑し之を携へ歸途に就しが時已に夕陽海に没して烟霞山に映じ天地靜寂として湖色瀟漫の中願れば雙影僅かに余と大尉のみ耳に無情を告ぐ

る遠寺の鐘の聲も聞えず、目に哀れを知らず暮鴉の啼求むる群もなし、土人の舊穴に歸り來て終夜火を燃やし大尉と共に語り明せしが夜深更に至りて隣家に確の音の聲もなければ唯時々野狐の寒月に叫ぶあるのみ夜色凄凉陰森の氣誰か毛髮の寒さを覺えざらん、凡夫も此に到て庶幾く人世界の悟道を知るに近からんか

第廿八 山路

嶺真無人の草原に、腐雞の未明に鳴て人語かす事もなければ、朽山顔屋夢自ら冷なれば應るどもなしに夜を明し、明け九月十一日なり脊に背囊を負ひ、手に銃を携へ一夜なりとも露にも濡すして凌ぎし何寄の幸なりきと心の中に土人の舊屋に感謝しつゝ、扉排して外に出でしが僅く是より如何なる路に就て歸らんかと工夫せしに大尉の來し路の海岸なれば歸りの山路に爲すべしと云ふ其も尤なりとて同意のしたれど四方唯茫茫として片岡頭小屋掛の場所も何の方向とも分らず、高原草蔓々として更に道逆もなければ暫し途方に暮たれど、楮止むべきにも非ざれば兎に角懷中より磁針を出して大凡の方向を定め東南さして草を踏分け踏みたり十二三町も歩みしに小川ありて之を渉り夫より山に昇りしが山の相も變らず五葉松榛密生して足踏場もなし處々松榛のなき處もあれば之を便りて廻り廻りて歩めどバツタリ行き詰りて左右とも例の密樹に隔まるゝ事あり已なく之を踏越て行く枝と枝との間に足躓りて扱ざる事あり 枝滑りて落る事

あり、股に支へて倒る、事あり、轉ぶが如く這ふが如くして漸く行く、山頂に登り詰れば、占守に高山なき故満自平原の如く遙遠なる者、烟霞湖に罩て雲かと疑はる、占守の廣袤の推算なれども磐城艦の測量する所に依れば島形長方形にして長十六里幅十里周圍五十里面積百平方里と稱す一端より一端を見る雲か山かと疑はる、も決して理なきに非ず、支那流に云はゞ燕子の所謂方百里にして以て王たるに足るに非ずや世人必ずしも占守を以て猶額豆大的一孤島とな爲し給ひそ足跡地に印せざれば辿りし路の程も分らず、歩み歩みて、とある斷崖絶壁の上にいでぬ、見れば雲の晴れ間より幌蓮の高山も見えて海岸に迷ひ落んとしたるなりけり再び進路を取直して進み、丘陵を越え谷を渡りしが谷間水際に往々草花の咲るを見たり、玫瑰とて方言「ハナス」と呼ぶ荆に似たる花や特に不思議なる一方の草の色已に霜に枯れて將さに凋落せんとし居るに内地の所謂五月花なる燕子花の今を盛に咲亂れ居るも中々に面白く、珍卉異草も數多ければ好奇心ひらむらと起りて道草喰ひく歩みしが蒲公英杯も我獨り春知顔に咲るも可笑く、思へば占守に春もなければ秋もなく雪の融間より降る閑途草木の萌出る期節にて千紫萬紅一時に開き一時に凋む物とこそ思はる、なれば午後二時頃漸く小屋に歸り着たり、途中にて一羽の鳥を撃止たり此鳥内地の者と異にして形大きく啼聲も亦變りたり、重ければ其儘で持歸る、骨折故其場にて料理し肉少し許持來りて試に炙りて食せしが思の外甘かりし、此旅にて又意外なるの遂に熊の姿をも見ぬ事

第廿九 植物

なりし大尉と共に余等小屋を出づる時此二日の旅必然熊に逢ふ事もやあらんと豫想したれば藥包實丸さへ込て用意怠らざりしに遂に逢はざりし幸か不幸か初めの恐くもありしが後に思へば殘惜くもありぬ、畢竟熊の食を求に出づるの多分夜中にて白晝に多く出で歩かぬ者と思はる去り連占守の如き高山深谷なく、樹木も亦なき處に白晝如何にして隠れ居るか想像の及ばぬ事ぞかし

翌十二日朝來天氣晴朗にて心地もいと爽なれば昨日路すがら目に觸し珍卉異草を集めんとて山に出でぬ、此地の植物を内地の人に紹介するも斯道の爲争で寸効なからめやと思ひ付きたる微衷なりけり、尙早く籠と鉢を手にして出でたり、内地の者に同じき草に、薊、蓬、七ツ葉、蒲公英、燕子花、花环にて木に石楠花、榛の類なれども、其道のものならぬ余等に見せぬ聞かせぬ者こそ却て多かりける、登に至れば一旦小屋に歸りて又出で、澤邊を通り、山に登り終日暮したり、夕刻彼の「フリップ」の多き處に至りたれば實を摘取りて持歸り、夜爐邊にて團樂の時鍋にて之を煮砂糖を混じ洋を絞りて皆にて飲しが、味酸して甘く葡萄酒に似て意外に良き飲料なりし之を釀酔せしめば酒類を醸すも出來難きに非ず

野景

翌十四日曉冷氣肌に透ると覺えしが起き出で見れば滿面霜を降して雪かと疑はれ、蘆枯草萎れ

て會員の一人が折角丹精して作りたる茶飲も、大根の葉寸餘にも延びしが、此箱に撲たれての憐れ無残の様となりぬ、性急なる四季順環の理の余等の爲に一刻も猶豫し居る者にあらねば、此日も亦植物を採集せんとて山に出でぬ、山に登りて思ひ付ねば感じもせざれど、一度内地の光景胸臆に寫し來れば、千島に蟲類の少々の最も不思議に思はるゝなり、斯く草中を踏分歩めど未だ一疋の蛇も蛙も目に觸れず、觸れぬに居らぬ證據なるべし、又山々樹々の梢に紅の錦染なす頃、カマドの麥圃稻田に飛通ふ様千島に於て得て見られぬ景色なり、雲霧の羽魔と叱る、蟬も居らねば莊庵の夢に入る蝶もなし、草葉に啣く鈴蟲松蟲の聲もなければ、霜夜の秋庭に衣かたしう獨寝るも鳴く蟋蟀の音とてもなし、故に白日清朗、山に登るも天に聲なく地に音なく、陰々寂々として、夜將に闇ならんとし、三更月已に落ちて草木隠る丑滿頃の夜景に異ならず、此境に在りて苟も一念希求の機を得ば、聞々見々心外に法なく、色々聲々境外に心なし、古の人句ありし隨二萬境一轉、轉處實能幽、隨一流、聽二得、性一無、喜亦無、憂と苦夫れ然らずや、數日以來の氣候の正午寒暖計五十六度乃至五十八度の間を昇降し居りぬ

瓦斯の信號

翌十五日の採集たる草木に手を入れて標本の下拵に終日費やし、夕刻より館のハコ繩を試みばやとて脚蹠海峽に解を出したり、大尉及び余外に樽を漕ぐ爲水兵一名と共に乗舟に漕ぎ廻り適當

の場所を尋ね繩を御居る間に今井崎の方に當て一陣の瓦斯起りて波を激し岩を掩しが左迄の事にも非ざるべしと侮て繩を御し終り魚の餌に付間暫時待居りしに、其瓦斯追々擴りて此方に襲來る故猶豫もならず繩を引上に掛しが瞬く間に疾風の勢にて山を包み海に布て白霧を張詰たる如く漸く繩を引上り歸らんと云ふ頃ハヤ已に四方濛々として咫尺を辨せずなりぬ、繩上の際解り知らず、く回轉したれば片岡灣の何れの向にあるや固より磁針杯用意し來るべき筈もなければどんど方向分らず、日も已に没したる後なれば遅るゝ程暗くもなりて仕末悪ければ三人途方に暮れ、占守の彼方ならん幌庭の此方ならんと云ふも唯斯思ふ許にて確なる目標とて一もなし顔見合せて暫し茫然たりしが追追夜色暗がるに付此日ハ丁度舊八月の初なりし故新月光を増て瓦斯の間に儘に録形の斑駁を示したり水兵先に見付て「月が出た」と彼も思はず絶叫したれば、何れなるやと問しにアレ向ふを指す方を見れば幽に月と思はるゝ所丈瓦斯の薄く見ゆるのみ實に是にても盲龜の浮木と云はん東西南北之にて知り得たり、占守の方向も分りたれば之に向て漕寄せしに首尾能く片岡灣に來りて上陸したり、小屋に歸來りて大尉の堅く會員等を戒めぬ、今後誰にても解を出したる後瓦斯の起る事もあらば必ず陸にて火を焚くか然らざれば空砲を發して信號を爲すに非ざれば解の者非常の危険に陥る事あるべし努忽に思ふなど嚴しく命じたり

第三十 アライト山の雪

九月十六日朝來海雨降りしきて何事も爲されず一同小屋に潜みたり、今曉不圖目覺たる折枕邊なる寒脚計を見しに四十三度に下り居りぬ、追々寒の加はり來る事室内の火氣の消え行くが如し、翌十七日曉に起き出で見ればアライト島の全山白妙を敷き白扇を倒したるが如し、是れの本年に至り二度目の雪にて占守の平地なれば何時も雨なれば高山丈に雪と化するなり此日も朝より細雨濛々、正午頃一旦霽しが西北の強風なれば磯邊の白浪を湧し簾々として其音凄まじし、波はつれて巨大なる流木漂ひ付たり、見れば已に何れかの海岸に打上り居しを覺しく岩に啣れたる痕缺落して削取たらん如くに見ゆ、思ふに風の模様波の工合により一旦吹寄せられて亦掃出され流木の處々島廻を爲す者ならん、

乗艦に決す

翌十八日も西北の強風益々吹荒む磐城艦の碇泊し居る別飛灣の風を正面に受るなれば嘯や甚しからんと噂し居りしに案の如く磐城艦も淺難くやありけん此日幌筵柏原灣に廻航し來りたり、余の風波の風次第乗艦するに決したれども此風波何時風ぐべしとも思はれず雲霧濛々として幌筵の峻嶽形を隠し今にも雪降らん許りの景色なりし正午寒脚計五十一度

湯浴

翌十九日今日こそこの風波風るならんと思ひしに前日に異なる事なし、唯雲霧少しく薄らざたり雲

の時間より見れば果して幌筵島の山々半腹まで白くなりぬ、一葦海水を隔てたる隣島まで獲ひ來りたれば占守の銀世界と變するも愈間もなしと思はれける今日も磐城に乘る事出來ねば徒然に暮せしが互に余等一行十人の姿を見てあるに何れも紗那出帆以來思ふ儘に沐浴せし事もなければ身体垢に染たるの勿論髪なども絶て櫛挿入し事なれば髭疎として蓬の如く特に占守に着以來の矮屋の中晝夜の別なく焚火を爲して之に圍樂し垢染みたる上を煙にて燻る爲め顔面一種の色を爲して兩眼徒に炯々たり宛から黒地蔵を列べたらん如く時々顔見合せて笑ふ事もありしが大尉の云へるに此の容体にて心さへ野卑陋劣ならん土人と何ぞ擇ぶ所あらんとて常に會員等に戯れたり余も其地蔵の一人なれば此儘にて磐城艦に乘るも面羞なるべし垢許りも洗ひ流して行くが良からんと勸められ大鍋にて湯を沸かし久々にて身軀を洗ひたり

翌廿日に至るも風波未だ風す、空しく心を焦つのみ、今更袂を分つ別れの惜まれざるにのちらねど已に一旦乗艦歸途に就くと決したれば事情亦是非もなし余も同行歸途に就に決したるの會員の一人なる山中直治とて後れて紗那より磐城に便乗し余等一行の安否を探らん爲に來りたる者と醫師島野の母の大患の報に接し是も歸るに決したれば都合三名にて食料の何程あるも餘剩と云ふ事なき絶海孤島の事なれば一日も早く磐城に乘移りて食料の助けとせんと思へど此風波に非もなし、又余の歸京に就てい何か會員の手にて捕へし獸皮にても土産として歸らしめんとて大尉始め

心配したれども何物もなければ會員の者四五名にて是非孤を頭捕へ来るべしとて此日未明に小屋を出て登壇に歸り來りしが生憎亦一頭も見當らざりしとて僅に鴨三羽許り射て來りしのみ

第卅一 別辭

九月廿一日始めて懸波靜浪平日の如くなりぬ、此日を過しての亦天候の變化漸られねば愈々乘艦と決したり、唯殘惜さし會員中森小野、上田の三名の余等に土産を取せんとして此日も未明に狐狩に出でたる儘未だ歸り來らず皆揃たる時別辭を云はせし想へば殘念なりとて暫し待暮せしが十時に至るも歸り來らず斯て餘り後る、も警城までの海路中々に遠く解いて漕渡るなれば歸の程も覺束なしとて三名に遣はざるを、誦め余等三名の解に乗込阪本、加戸、白瀬の三名に本艦まで送りける積大尉も海岸迄見送與此處にて互に帽を打振別を告しが如何に世の爲國の爲覺悟極し身ながら一度警城艦を抜て南に歸れば内地の消息全く絶、死生安否も告るに由なく、陽渡る風は其を暮し磯打波に夜を明し、一年近き其間罪なくして見る配所の月雪の朝、風の夕、哀情の常に逆旅に多く、斷腸の偏に秋天にある者を袂を分るも亦今更の如くに思はれ見れば大尉の孤影軀々として海岸にあり如何に凡骨ならざる彼人も丈夫豈一滴の涙ならぬやと思へば其時の感慨實に云れに忍びざりし、思ひ歸め樟拍子轉く漕出でしが颯漣海峽の名にしおふ急潮激流にて滿潮の時の東南より西北に流れ干潮の時の反對に掃ひ出す其速力一時間にて四哩乃至五哩半との警城の測定にて

時恰も滿潮に際したれば余等の解の警城に向に正しく逆潮にて一直線に警城目標で漕行さしに海峽の中頃に至れば海面風なくして白波洶湧大河の滔々として石に激し岩に砕くも如し木の葉の如き小艇何條堪らん左の舷を激潮の爲に叩れし故腕を限りに漕をも押とも次第々々に流されて斜に横ざり漸く對岸颯漣に達し夫より又海岸を縫て漕行漸く警城艦に達したるの午後二時頃にて一直線なれば三哩程の距離なるを四時間餘を費したり、直に艦長に會て便乗の許を得ぬ、本艦此日別飛に廻航し最早歸帆の途に就く準備なりしに如何なる事か左右兩舷、仰しある鎖鎖緊く擲付て上らず余等の行し時の艦長始め之が爲に斡旋最中にて此日早朝より掛り終日費やして夕刻漸く釋はたり降く所に依れ、急流の急激なる爲斯く鎖鎖の擲みたる者となん箇様の事往々ある者の由なれども緊擲此如なるの餘程稀にて殆んど例なしと云へり、余の乗り來りし解の別を告げて歸り去り此夜警城艦に一夜の夢を結びたり

第卅二 堪察加

以て廿二日午前六時本艦錨を抜て占守島別飛海に廻りたり、別飛に六環て湖の干満測量の爲天幕を張り乗組員の上陸し居るあれは之を引上げ歸航の準備を爲やにて直に端艇を仰して其手筈を爲又別に測量の爲二隻の端艇をも仰し夫より本艦の堪察加半島近く進航し占守と半島の間なる久留里海峽の入口迄進みたり同海峽の未測量なれば來年警城の此海峽の測量に従事する豫定なるやに

て斯くの試航を爲したる由斯堪察加に接近したれば半島の高嶺の帆々空を摩して目前に展々雪降しと覺しく全山白雪皚々たり本艦將に歸航に就んとする頃今まで一天風なく細漣微波さへなかりしに急に西の強風吹起りて狂瀾怒濤を捲たりこの叶はし嘯や測量の爲に出し二隻の端艇如何に難儀しつらめと艦内一同心配し直に本艦を廻して搜索せしが一隻の端艇の首尾能く早く目に止りて直に引上しが是とて正午頃より腕を眼に陸地を目標て櫂を漕たれども段々沖へ流さるゝのみにて餘方なく櫂を振り居し村上少尉候補生の如きも頭から潮水を浴て瀟風如し、今一隻如何にせしかと聞けきを分らざる由にて又々沖へ出て搜索せしが何分見當らず風の益々強く浪の益益高し曾て報効義會三番艇の被沖にて覆没せしも斯やと思ふ許にて身の毛のよっぴりなり搜索しても見當らざれば引返し來りしに都合よく遙の沖合に棒の先に手拭を縛り波のまじく漂ひ居るを見たりソレ「カッター」見えたとて船中動搖めき艦長一令を下したらんと見え其方に針を向けて近寄り之をも拯ひ上しが時已に夕陽海に没して暮靄暗からんとする頃なれば今一時後もせば如何なる危難に際したらん嗚呼危かりしく、端艇にても已に堪察加に流さるゝ覺悟を極めたるも又己れの死するの海軍に居る間常に覺悟の前なれと國に残しある老母の嘯や嘆くならん杯愁然たるもあやし由にて命拾を爲たりとて皆喜色満面に溢たり此夜別飛艇に投錨碇泊したり

第卅二 外國獵船

九月廿三日、此日の秋季皇靈祭にてありける故軍艦にても國旗を橋頭に翻へして遙に御稜威の世に輝きて灼然なるを祝ひ奉り、空も殊の外麗かにて前日の風波も靜穩に歸しければ心氣も頗り爽快を覺えて只管四海を治めす皇威の遠隔にも及び一刻も早く千島にも旭旗の影の光を増さん事を祈るの外なかりけり、軍艦にては歸航の準備残る方なく整ひたれば今日愈々出帆を決しぬ、來る時路を西北岸に取れば歸航の東南に沿ふやにて一度巖崑島の柏原灣に立寄り海峡を南に通過する針路なれば午前八時別飛艇に錨を抜て柏原灣に向ひたり最早柏原灣内を煙囪の中に眺むる頃に到りたれば灣内に小帆船の碇泊し居るを見ぬ、已に水産會社の獵虎船も南に歸りたれば今頃日本船の此邊に居るべき筈なし必定外國獵船の寄泊したる者ならんと推しぬ、船と船と相逢ふや互に國旗を掲ぐるの例なれと距離遠ければ未だ閃く旗影も見えず追々近くに從つて双眼鏡を執て仔細に見れば短もなく米國の國旗なりけり、スハ、愈々外國獵船よな彼等も灣内に於て帆を巻錨を投じ居れば逃るに逃れず、覺悟の臍を堅めたらん如くに見ゆ、愈々接近して灣内彼船と間近の處に錨を投じたり、彼船にては紅綠線眼の徒甲板の上を彼方此方に逍遙も見えたり、軍艦にては空しく看過すべきに非ざれば一隻の端艇を派し干津川少尉、不二樹少主計乗返詰問の爲出向たり、余も艦長に請ふて許可を得たれば同乗して彼の獵船に行たり、先船長に面會せんとて案内を頼みしに水夫らじき者其室に導りたり、見るに其邊の不潔なる事言語に絶え、船長なる者ハ齡

五十位にもありぬべく白髯の翁にして衣類も垢じみ手足も何日となく洗ひし事もなきやと思はるる許、水夫も同様にて我士官と彼船長との問答中時々顔を覗込て、室内を窺ひ居れり、彼船長の常に横濱に居るやにて片言交の日本語を辯じたり不二樹少主計主に問答せしが其尋問に答へたる大要の

國籍	合衆國	船名	エンマ號
船長	ハンドソン	船主	ソニンヌー
乗組	十人	發程地	銅島
向航地	横濱	入港の理由	飲料水汲取の爲
入港月日	九月廿一日	積荷	臘腸皮六十五枚

噸數 廿一噸、四〇にして本年春横濱を解纜して臘腸の獵を爲しつ、北米アラスカに至り一旦收獲せし獸皮を賣捌きて本年八月十八日アラスカを出帆し銅島(堪察加半島の東南に位するコマンドル、スキト群島の一にして露領なり)近傍にて獵を爲し夫より此相原灣に來りたるものなり、初め尋問に先ち彼船長ハ密獵船ならずとの證據として臘虎臘腸の漁獵を免許せし米國政府の公許狀及び沿岸三十哩以外にて漁獵を認可せし露國領事の免許狀を示し尙獵獲の場所をハ航海圖を披きて此處より

此處に至り錨を投じたりとて鉛筆を以て黒線を引きたる痕を示し、規則に違反したる事なしとて得々誇る者の如し最後に至り我士官ハ此の灣ハ元來開港場にあらざるに何故寄泊したりやと詰問に及べば、彼曰く開港場に非ざるハ固々、知る所なれども唯如何せん航海中飲料水盡たれば之を得んが爲に寄港したるのみ決して他意あるに非ずと、是彼等を處置するに最も困難なる事情なり航海中飲料水の缺乏程船中に於て困難なるハあらじ去れば縱令飲料水盡たるも此處ハ開港場ならねば汲取ることを許さじ直に出帆せよとハ人類を遇する道に於て特に舟乗の交際として頗る言ひ惡き言葉にして況てや現に飲料水の乏きを實見したる上ハ斯く斷言する事の出來ざるハ當然にて士官も然らば寸時も早く水を汲取出帆すべしと嚴命を下すの外なきハ亦是非もなき事ぞかし此時可笑かりしハ彼の船に水夫の一名齒痛の爲顔を腫して頗る惱み居る者あり、余等行たれば彼出來りて片手にて顔を押し顔を腫め軍艦の醫者に齒の療治を頼たしと云ふ様いと可笑士官ハ軍艦の醫師ハ他の者を療治する者にあらねばと斷りたれども頻に請ふて已ざりしが聞かぬ振して用事を終り端艇に乗歸しに我艇より先に一隻の端艇軍艦目掛て漕行く者あり見れば彼齒を病る者及外一名なれば水兵等を急がして跡追掛何處へ行くやと問ひたれば療治の爲軍艦へ行くなりと答へぬ、如何に彼等のソウ／＼しざ一撥を喫する許呆れて物も言ざりしが艦長の許を得ねば軍艦に行くも無用なりとて漸く返せしが彼等の沮侮るの舉動此の如し左ハ去ながら僅か廿一噸餘の小帆船にし

18
461

太平洋の激浪怒濤を馳り千島の濃烟濛霧を冒して縦横に貴重海獸を獵獲し其收益を占むる彼等の剛膽如何に欽羨すべきに非ずや航海志望の切弱なる我國人徒に彼を賣て己を賣ざるの過れるの極なり

此日午後二時半出臨準備柏原灣解纜歸航の途に就きたり

歸航

翌廿四日朝來西南の強風甚だしく船体動搖三十六度の傾斜を爲すに至りたり寒暖計正午四十七度を示す

翌廿五日風波風午前二天晴朗にて右舷に計斗夷新知杯の群島を見しが正午より瓦斯起り夜に入り細雨濛々正午五十三度

翌廿六日朝來濃霧なれども風波靜穩なりし午前霧の爲に艦位不明なりしが後三時過に至りて右舷に色丹島を認めたり夜に入り非常の暖氣にて寒暖計も六十三度に上り問はずして根室近海に接近したるを知りぬ、此夜ハシホツ島近海に投錨して夜を明かし明曉根室港に入泊するやの豫定

根室に着

翌廿七日シホツ島近邊を思ひしの水品島にして是より根室港まで二十哩餘の少距離、一天晴朗にして蒼々たる青空殆んど別天地に到るの風ありし午前十一時根室に入港上陸せり

明治廿七年七月印刷

同年同月二十日發行

(非賣品)

東京麻布區材木町三番地

著作兼發行
兼印刷者

横川 勇次

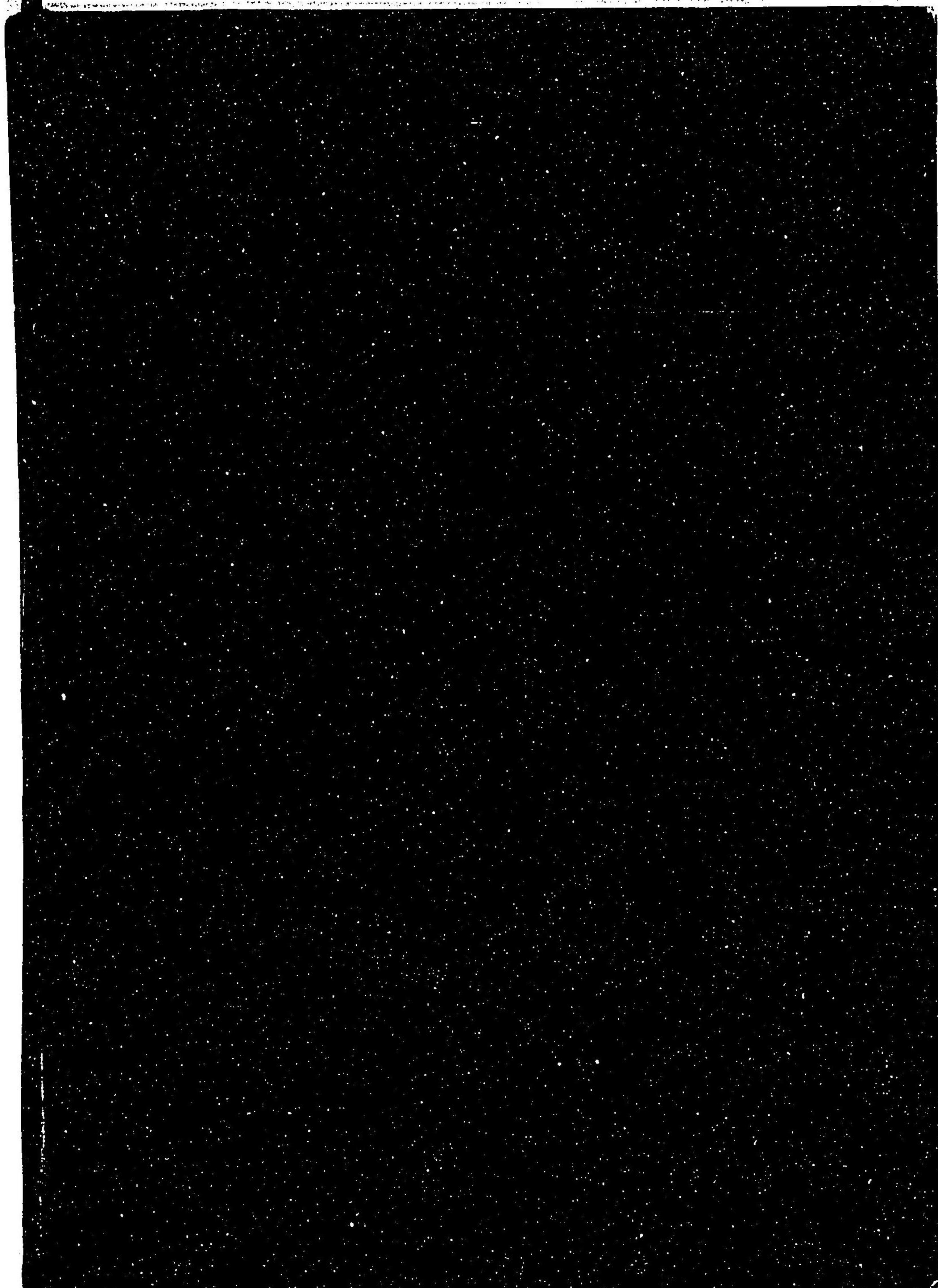
同京橋區灘山町四番地

印刷所

東京朝日新聞社

18

461



10
761

023203-000-7

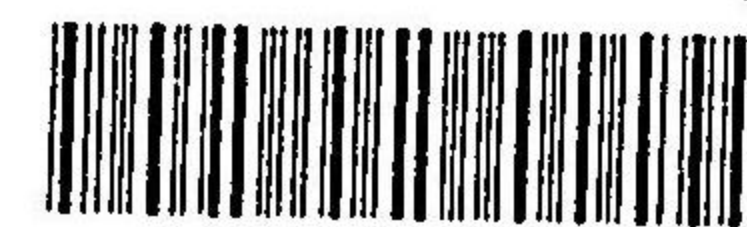
18-461

千島紀行

横川 勇次/著

M27

ADC-0040





3210-7

